櫻痴居士戲著
增訂色しや草紙
文海堂藏先

国立国会
27.3.-4
図書館

260822

増訂もしや草紙序

喜ふべく嗔るべく笑ふべく哭くべきものハ社會の顯象なり是れ豈ゝ居士が放言ならんや居士春來宿痾再び發りて劇務に堪えざるゝ由り東京日々新聞の主宰を擧て後任に托したるに後任ハ居士が全く筆を紙上ゝ絶たん事を惜み責てハ戯著にても稿してよと請へり其さへ拒辭せんも了得なれば毎日〻〻心ゝ浮べる儘を書綴りたるもしや草紙これと云ふ趣向もなけれは結搆も無し書肆石塚氏が勸に應じて增補訂正を加へたれど實ハ册子となして世上に示す程の價直なきは居士みづから是を知る抑も居士が此草紙を稿せる

ハ敢て世を嘲り俗を罵らんが爲まは非さるに世上讀者の眼光ハ往〻居士が思想の外に透射して種〻の品評を下し來るを以て居士に取ては迷惑なりと思ふ事も尠からず原來取り留めも無い寐言にハ何の深意微旨のあるべきぞ然らば則ち此草紙や得意を鳴らせりと云ハんも可なり不平を訴へたりと云ハんも可なり滑稽の間に諷刺を寓せりと云ハんも江湖の狀を寫して悲憤を洩せりと云ハんも亦皆可なり讀者乞ふ隨意に讀み隨意に評せよ居士ハ決して之に關せさるなり

明治廿一年十一月

櫻癡居士識

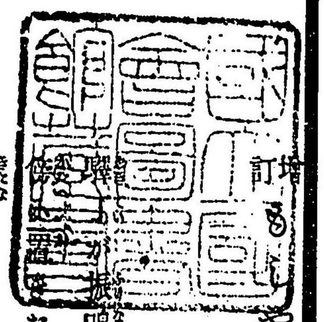
もしや草紙緒言

夢かと思へば夢にもあらす現かと見れぱうつゝとも覺えず夢ならぬ早く醒よ現には爭でさる事のあるべきやとは悟れども悟られぬが即ち浮世よもしや今のが正夢かと云ふ樣な事が明日の日ふでもあつては大變ころばぬ先に鳩の杖長雨に土藏の目塗たゞ々用心に若はなしア、浮世は夢、夢の中での夢ばなしもしやの夢ハ又その夢寢言のまゝの根なしぐさ聞たか見たかも臟にて筆に任する戯著なれば固より是と目指たる的標もない夢鐵炮ナンダカ障つた心地がしても其が所謂偶中り必らず御氣に懸られな寢言ちやぢやく

明治二十一年八月二十一日の夜櫻癡居士寢ぼけながらに識す

櫻癡居士戯著

〇第壹回



鳴したる鈴の音に夢を醒し寝ぼけ眼をコスリながら周章て穢くよごれたるを重げに提げ左の手には蝙蝠傘と太やかなる杖を持て同車の乗客と共に押合ひヘシ合ひ飛出したる有様は左ながら一番乗の功名に先を爭ふに異ならず車を下りたる旅客は夫々に皆其場を去りたれば左しもに廣きステーションも車が着てから僅か七八分をかりの時間にて忽ちヒッソリとは成にける。彼の旅帽先生のみは未だ屋ひ車を見當らざるか夫とも出迎の者に會はざるにや獨り茫然として佇みしがステーションの正面を見上げ、ハヽァーもふ日本でも羅馬文字や亞拉比數字を一体に用ゆると見えるな……ムー日本紀元二

千五百六十三年、明治三十六年、基督紀元二千〇三年八月廿一日、ナルほど年月日をコウ大きく張り出して置くは調法ぢやと口の内にて獨語ながら其處あたりを見廻しユキハテナ此は上野のステーションである筈だが向ふに雁鍋や岡村の看板が見えぬは不思議……尤もれれが東京を出てよりモウ滿十五年になるから普請も煉瓦に改まり此所の店も換つたの知らぬが夫にしてもマサカ上野の公園までが引越した譯では有るまいに公園も見えぬは不思議ダと口小言を並べて彼所此處と彷徨たるを見て驛丁ハコイツ初めて東京に來た漢と見て取り貴君は何所へお出なさるので御座るかと問へば旅帽は落付たる顏色にてイヤ余は只今車から下りてツイ近所へ參る者で御座るが夫にしても此ハ上野のステーションで御座らうナ。イヽエ此は北ステーションで原は佐久間町の河岸とヤた所で上野はズット後で御座る……シテ貴君のお出先ハどちらで御座りますか。ナル程こゝは佐久間町ダ、あれが筋違の眼鏡橋の二代目ダナと頻に見廻して漸く方角がポンヤリと分解たかして驛丁に向ひ、余が參らうと思ふ先は下谷ではお多福横町、神田でハお玉が池、兩國では山伏井戸の醫者新道で御座る決して御心配下されるなと事もなげに答へてステーションを立出で客待の雇馬車を呼びやがて荷物など請取て馬車の屋根に載せ往先は是〻なりと差圖すれども御者には更に分らず。氣の利かぬ御者ではある、儞は大かた昨日あたり無人島から來た人であらう去とは東京不案内そまでよく御者が出來ると喇れば御者も亦旅帽の面をゼ穴の明くほど見詰てハヽアおまへさんは加莫察加から初て東京見物に來たれ方ぢやナ今朝烏蘇里から來た客はおまへさんより餘ぽと東京の方角を知て居たと賣詞に買詞次第に聲が高くなり車夫や馬丁が何事なるかと集れは巡査も其所に來合せて委細を聞き旅帽に向ひィヤ是は御者が申す方が尤もで御座る……貴君は何地より れ出なされた……ナルほど十五年

目に只今東京に歸つた所で御座ると……フー左樣な町名は十五年前までは殘つて居たらうが只今でハ誰も申さねば知つたものもないて……夫ゐ市區改正が追〻に出來るので町筋も替れは町名も替つて昔の字はトント通用いたさぬてナ……イヤ〳〵知れるとも〳〵東京方角辭書の江戸古名部を搜せゞ屹と知れるが此處には備へて無いから間に合ひ申さぬ……ハテ困つたものだサゾ御當惑で御座らうナと種〻に工夫しても思索に能はず果は日本橋邊の何がしホテルは上等の旅館にて取扱も信切なりと云ふに付き去らゞとて旅帽は御者に誘はれ心細くも其の旅館へハ投じたり

○第貳回

疊數にて申さゞ凡そ十二疊敷ほどの座敷にて二階の巽角尤も外部は煉瓦造の西洋家なれど內部の造作は西洋三割日本六割支那一割と云ふ折衷主義にて即ち主人の居間なり水戸マーブルの爐板の上に薩摩燒の花瓶一對を左右にならべ(牡丹)の花盛りに蝶が舞ひ遊びたる橫濱仕込の繪付なり中央には瑞西名物の置時計燒附の水金はピカリ〳〵と硝子の覆の中に光つたり其側に白木の小箱を萌葱絹眞田の十文字に掛つたる儘にて載せ置たるは其中なにとも知れねども大かた昨日懇意のものが京都土產に持參したる道八の急須に非ずんは是れ今春の近火に世間の附合で據どころ無く惠恤金を出したる賞として先日區役所の手を經て賜はつたる木盃一個なるべし唐木緣の姿見は硝子板薄くして且つ扁たりと雖も出處正しき競賣の古物なり縫箔したるテーブル掛は品柄あまり結構ならずと申せども敢て博覽會の殘品には非らず机の上に多數を占めたるは日本帳面に西洋簿冊其外は諸銀行會社の報告書にて黑塗皮銀金ものゝ提包の陰より半身を現はした

るは何事につけても主人が第一の顧問と頼める廣島算盤なり硯箱の傍に、堆く積みたるは一目にて出入の仲買より毎日送り越せる相場付とは知られたり壁に掛けたる應舉の畫幅は東京仕入なれど三級の涙を昇る程の勢ある鯉とも見えぬど朝日を避けたる窓掛の織物は古物ゐゞら金糸の色は燦然たり。主人は年の頃凡そ五十三四と覺しく頭は半ば禿て昔の名殘を留め脊は頗る低くれ負に肥つたれば洋服には向の悪い体つきなり顔の色は黒く油ぎつたれど揉上より顳顬に掛けて生たる白鬚をば一しほ白く見せ眉の太く長きは有がたき和尚さまの如く眼の小さくて深く窪みたるハ田螺にさも似たり眼尻の下つたると横鼻の廣がつたる所は色情の濃さうなる相なれども夜具の袖の如き唇を固く結びて益々其面を三味線の胴の如く角ばらせたるにて拜金宗の先達なることまがふ方なけれど人情ふ牽さるゝなど云ふ弱みは二十年來曾て之なき慾ふい無類の剛の者、午後五時三十分ばかりゐ

る黒色薄羅紗の上衣に同じ色の胴着を着し鼠縞の大股引のタブくしたるを三寸短に穿き其下より赤白ダンダラの履足袋を立派に顯はし銀座出來の上履をはき向島製のベルシャ皮もて張たる大椅子にドッカともたれ原來流行物は嫌なれど襦絆の襟と袖口ハ儉約なりとて白ゴムを用ひたるに引替て金鎖の重げなるを胸にかけ大なる金時計がチラリとチョッキの隱から龍頭を出したるは甚だ以て不似合なれど是も抵當流れか到來物ゆゑ據なく所持するゐるべし、銀縁の目鏡を掛けて今朝の物價新報を手に取り相場の部を暫らく睨み詰たりしがニッコリ笑て振返り時計を見てモウ十時十五分になるゐまた寄付の相場が來ぬはどうだらうと獨り呟きたるは昨日から郵船株の上りに餘程の利か買玉に乘つたる喜びとは蠢めく小鼻に現はまたり折から此家の下女は名刺を手にもつて入來り、旦那樣このお方が昨日西洋から歸りました御在宅ならば一寸御目に掛りたいとお玄關へお

出でゞ御座りますと差出したる名刺を主人は手に取つて見るに表は西洋字でクシャ〳〵と印刷したるに裏には行書にて清水潔とは記したり。ハテナ清水潔……潔と首を傾けて考へしが、ム、あの清水の息子かと其人が分つたと見えて目鏡の上から下女の顔を見てコレ初や其お方を表の西洋座敷へお通し申して只今お目に掛りますと申せと言附け夫から村田の眞鍮張銀吸口の烟管を取り雲井の烟草を鄭寧につぎスウ〳〵云ふまで二服ほど吸つてコッ〳〵とはたき表座敷へは向ひたり。抑も此主人と云ふは郡樫藏とて元は江州八幡在出生の賤しき者なりしが三十餘年前に東京に來り痛く流涙したりけるを清水の父が其辛抱強きを見出して數ヶ月ほど自分の内に置て手代に使ひ夫から世話して或る會社に住込せたるに三四年の後に給金の餘りや内證で稼いだる小金を資本に小商を初めたれば清水の父は更に數百金を出し有る時拂ひの催促なしと云ふ事にて無證文で貸し與へ其後も度

度融通して助けたる程に樫藏は段〳〵都合よく最初は五兩一歩三月約り禮金一割手數料五分と云ふ酷い金を貸して取り付き後には相應の身上となり株の上りや米の下りに利運を占め今では立派な身代世間の附合には風下にも置かれぬ人物なれど何をいふにも金のあるのが其身の強み日本橋では指折の高利貸旦那〳〵と立てられて先づ紳士の列に數へらるゝ人物なり

下女の案内につれていま郡が表座敷に通つたる清水潔は即ち前回の旅帽先生にて年の頃一寸見にハ三十六七に見ゆれど年ごろ苦勞をしたる故か年よりハふけて見ゆれど實は三十三四ぐらゐなり髪の毛は黑くて多き方なるをワザと短く切たるは永の旅行に斬髪が面倒なと暑氣の折から頭を洗ふに便なるが故なるべし眉は地藏眉にて女の樣なれど眼は太く凉やかゐて才智の勝れたるを表し鼻筋は通つて高く口元は男には惜いものと云ふ程に締て小さく唇薄く齒ならびよく顔の

形は先づ丸き方にて少く下豐なるが髭は鼻の下のみ生して其外は奇麗に剃つたれば其痕青みたり色は一体白き質なれども顔と手先の少し黑みたるは道中の炎天に焦たるゆゑと思はれたり脊はスラリと高く肉も相應にあつてよい恰服女好のするよりも孰かといへば男好の する人品骨柄なり、黑羅紗のフロックコートに同じチョッキを着し中形の金時計を打紐にてさげ竪縞の股引黑靴白襦絆の釦鈕襟飾りまで すべて目に立たぬ恰當なる拵へ但しコートには赤い略紐を結び襟には金のメダィルを懸けたるは是なん外國にて勳章を賜はり賞牌を贈られたる標として一際うの品格を上げたり、座敷に通りて小さき椅子に腰うち掛け主人の出て來るを待たるに程もなく出來つたるは郡樫藏ナニカ横柄顔に挨拶をなし……フーナル程貴君は清水さんの御子息だナ……十五年の間洋行して……是から身を立る事を工夫せねばならぬと……貴君の御器量なら屹と瞬く内に立派に御出世が出來ますヨ御受合だなど、世事ダラ〳〵に返答はすれど中〻世話などしやうと云ふ心の更に無い事は口は言はねど目が言へば隱せど色に顯はれたり。清水は郡が親のなじみと云ふにつけ昔なつかしく思ひ其身の事を打明て物語りしが今うの物語と其身の素性を手短に引綁めて申せば先づ左の如し

此清水潔の父と申すは清水金作とて幕府の頃は廣く諸大名の用達を務めたる歴〻の町人なり御一新の後は身代も少し傾きて原の如くには有らざりしかど幸ひに是までの用達金が公債の處分と相成つたるに付き再ひ息を吹返し銀行諸會社の株をも數多所持なし駿河臺甲賀町邊に家を構へ裕福に暮したり。子供は男子兩人女一人を設けたれども總領の娘ハ七歳のころに死し末子も亦生れて程なく失くなりたれば僅に一人の男子のみにて是が即ち清水潔なり。然るに金作の妻が明治十七年に身まかりて後はまた後妻を迎へず潔を

ば大切に育て十二歳の頃には尋常中學に入れ十六歳の頃には高等中學に轉じて勉強せしめ只管ふ其成業の日をのみ樂しみとしたるに如何なる宿世の因果にてやありけん明治二十一年の夏に至りて金作は胃病に罹り兎角に氣分の勝れざりけれを醫師の勸に由り且は鐵山の塲所見分かたゞ七月上旬に東京を立ちて會津地方に赴き十三日より磐梯山の温泉に療浴したるに其月十五日の朝おもひ掛なき磐梯山の破裂噴火の變に遇ひ非業の最期を遂げ空しく泥灰の中に葬られたるぞ無慙なる。潔は此變を聞きて親族と共に急ぎ其塲所に駈付たれども固より救ふべき手段とても無く遺體さへ漸くの事にて人夫を賴みて堀出したる位の事なれを泣く〳〵其近傍にて荼毘の煙となし白骨を携へて東京に歸り法の如く谷中なる菩提寺に葬り扨て夫より親族うち寄りて家事取纏め方の相談に及びたるに清水の家ふは金作と潔の父子のみにて其他は皆召仕の男女ばかりなれば潔が家を立る迄は斯く多人數のものを用もなきに抱へ置くに及ばすとて中陰の過るを俟て數多の男女ふは皆暇を出し其家屋家財は都て賣拂ひて資金に替へ取引の銀行に預け潔は一旦叔父の家に同居する事に決したり。此時潔は十九歳にて才智人に秀で學術も優等なるが上に生得温和にて沈着たる若ものなりければ深く其身の上の前途を考へて浮とは人の口車に乘らす親族及び懇意の向に清水が家産を目的に種〻と信切めかしく相談相手に成て遣らうと云ふれ世話燒があれを潔は宜き程に接遇て打拂ひ一人にて其處分を工夫したるが去るにても父の金作が所有財産の中にて地所家屋家財公債株券の類は發燼と分てあれど銀行への預け金諸所への貸出し金は何程ありしや更に分らす、勿論帳面類證文類も慥に父が手許の用箪笥に入れ置いてあつたに相違ない事は知つたれど磐梯山の變事の頃には潔は學校暑中休にて學校明僧兩三輩と打連れて

信州の方に旅行したれど變事の電信を請取ると其儘に旅行先より駈付たるに付き歸宅の上にて取調べたるに帳面類はあれど肝心の銀行通ひ帳や貸金帳は見えず證文箱の内も反古證文計り十餘通あつて生たる證文は盡く紛失したり、是は潔が未だ歸宅せざる前か夫とも葬式等の混雜に叔父なる清水山四郎が番頭と腹を合せて仕組し事ならんと覘は附たれど證據なければ持出す事も出來ず潔は殘念ながらも深く一人の胸中に藏めて色にも出さゞりき。斯くて其年の九月下旬ふ至りて金作が百ケ日の法會も丁寧に執行ひて後に潔は地面家屋株券其外をも盡く賣拂ひて整理公債證書貳萬圓を買入れ記名となして是を父の代より取引の某國立銀行に預け其外に現金凡壹萬圓ありけるを叔父が頻に勸むるに付き止を得ず叔父が取締役を勤め居たる某私立銀行へ年六分の利にて定期預となし此の利子と右の公債の利子とを合せて毎年一千六百圓は潔が手に入るとに定まつたり。斯く家事を取片付たる上は別に用事もなければ潔が兼て心懸たる西洋留學の志を決し右の千六百圓の中にて毎年千圓づゝを潔が留學の先に送り殘り六百圓の中にて菩提寺の附届け諸稅其外を仕拂ひ其殘りは叔父の銀行へ預くる事に約定を取結び潔は是より滿十五年の留學にとて同年十月中旬横濱出帆の米國飛脚船に乘込み馴し東京を後になして外國へは赴きたり

それより潔は十月下旬に桑港に着し米國の大陸を經て新約克に達し同地より大西洋濠船に乘りて英國のリバプールに着船し倫敦に赴きて學科を終め明治廿二年にはケムブリッヂ大學に入り同廿五年に卒業して法科得業士の學位を得なほも同校にて研究の功を積み居たる内に日本にては潔の叔父が株券の相場に引掛つて非常の失敗を招き當人の身代は云ふに及ばず其銀行までも閉店と相成つたる騷動なれば氣の毒なるかな潔が預ケ金壹萬貳千余圓は皆無

となれり、幸に國立銀行の公債證書ハ記名ゆゑ叔父も流通する譯にゆかず其上に其銀行の頭取が清水潔より預つたる公債ゐれを他人に渡すとは相成り申さすと嚴しくはね附けたるに由つて夫だけは傷が附かず右の利子を其以後は彼の國立銀行より送り來るゆて潔は學資に差支なく勉强し遂に學士の位に昇つたり夫よりして潔は大陸に渡り佛蘭西、獨逸の兩國にて有名なる大學に入りて猶も其功を積み凡そ法律經濟商業の各科みな其奥儀を究め殊に辨論文章に長し速記は尤も得意の技にてありける程に諸會社あるは諸商店にても潔を聘雇して一廉の役員に成さんと申入るゝも多けれど潔は深き望みありとて皆これを斷りて專ら實地の研究に力を用ひたれば到る處にて日本人中拔群の人物なりと賞られ別て婦人仲間にては尤も評判よく青年の花とまでに呼ぶたり

斯く勉强の上にて今は日本に歸り事業に取掛りても懸念ある可からずと人も勸め自分も左こうと思ひたれど去らべとて今年明治三十六年の一月を以て佛國のカレーより海底隧道の鐵道を經て英國のドーバーに達し三ケ月ほど倫敦に滯留して再び歸路を米國に取り加拿陀のワンクーウエル港を本月(八月)十日の夕に發し同き二十日の朝を以て青森の港に着し同所より直ふ鐵道に乘り翌廿一日の夜に東京にゝ歸り來れり。叔父の山四郎ハ其頃既に死し遺族が下谷お多福横町に住ひ居るとの事なれば先づ其方に落付くか然らずば其昔し父の金作か召仕ひたる番頭某しがお玉が池の宅か又は舊友の某が山伏井戸の宅に落付かんと思ひたれど宿所が分らねば據なく其夜は日本橋邊の旅館に一泊して明けなば誰を音信て心事を語り相談せんと思案したるに郡樫藏こりは差向き其人なるべけれ彼は隨分いやな人物なれど父が格別に目を掛たる漢なり其上に此節ゝ身代も出來て紳士の列に加はり殊には先年海防費獻金にて從八

位になつたる位なればまさかに悪くは取計ふまじ兎も角もまづ此漢を尋ねて見んものをとて扨は本文の如く音信たる事と知るべし

○第三回

此人ならでと思ひたる郡樫藏は思の外の人物、いかに清水潔が舊縁のある仁であらうが何のうの金ふなるなら此方から頼み申してもお世話を仕やう損がいく事なら眞平御免を蒙りませう併し貴君が銀行へお預の公債を賣拂ひ二萬圓の現金を無利息で私へ御預け下さるなら只今でも直に宜しう御座ると云ふ樣な氣風を見て取り、清水ハ呆果て何れ近日また上りませうとソコ〳〵に挨拶して郡が宅を出て……ヤレ〳〵驚き入たる驢馬め日本には猶太は居ないと思つたがドウして〳〵樫藏を見たら正銘の猶太も肝を潰し三舎を避るであらうと呟きながら旅舘に歸り甚だ以て快からず午餐を喫畢りて後ち去らば叔父の遺族が當時下谷のお多福横町に居るを訪ねんとて旅舘に備へたる東京方角案内と云ふ本にて場所を調べたるに昨夜ステーションで知れざりしも道理この横町は明治廿六年に道路取廣げと相成り只今ふては三等の大通り漸くに尋ね當つて問合すれど清水が妻子は此處を引越して今では入谷の朝顔園と云ふ花屋敷と熱海温泉の出張所との間なる裏長屋に住み母子二人で幽に其日を送つて居るとのこと、夫は氣の毒千萬叔父は餘り面白からぬ人でありしかど叔母(叔父の妻)には子供の折に可愛がられた事もあつた、叔父が身代限りして後に失くなつた事なれば跡に殘つて妻子は定めて難儀をする事であらうと原より人情ぶかき信切もの、潔ゆゑ先から先へと捜して遂に尋ね當てて見たるゆ思つたよりも猶ひどい暮し九尺二間の裏店住居その有樣を書綴らんはクダ〳〵しければ略して云はず凡そ貧乏世帶の最下等

に見るもの一ッとして備らざる所なしと評して可なり。まだ殘暑の強き折なれど東表西裏の田樂長屋涼しい風と來たら一昨年の七月に大南が吹た以來入つた事は無いと云ふ向の處に清水の後家お賢は鐵緣の目鏡を掛けて頻に麥藁眞田を組み娘の乙女は絹ハンケチーフの縫を一心にして居れり是ぞ母子が其日を送る煙の種とぞ知られたる。清水は臺所の傍なる三尺四方の土間が一尺ほどは糠味噌桶と割薪と雨戸に押領せられお負に上汐よろしくと云ふ下駄二足を脱たれば空地とては僅に方一尺八寸餘と云ふ所に入りて小聲にて御免なさいと音なへを乙女は縫ものゝ針をやめハイ誰君で御座います。一寸れ尋ねヤますが清水山四郎さまのお跡は此家で御座いますか。ハイ左樣で御座いますが貴君は。私は潔で御座いますが叔母さまはと問ふを待たず乙女はかなたを向ひてお母さんアノ潔さんがお出で御座いますヨと喜びて知らするを聞きお賢は膝の上に並べて組かけたる麥藁を散ら

ぬ様に前垂を外づして引つゝみ立上りて潔を見てオヤマー潔さんドウしてれ出だ……よく此所か知れましたネ……昨夕洋行からお歸りとエ……マーお上りヨ乙女やお母さんが常〻話して聞かせた潔さんは此お方だヨ……と喜びの餘にや話す詞もあとや先たゞ先つものは涙ぐみ。清水は叔母の顔をツク〴〵と見れば年はまだ五十路を越したる計りなるに甚く衰へ昔の俤は盡く消え失せて淺ましき老婆とはなりぬ、ア、是も貧乏ゆゑかと推察すれば哀れにも亦痛はし、。お賢は涙ながら清水に向ひ潔さんマア聞てれくれよ叔父さんは(即ち清水山四郎とてお賢の夫潔が叔父なり)貴君が洋行のれ留主中であつたが丁度十年前株券の相場騒動で身代限ふなり昨日までの暮しに引替て翌日からは下谷お多福横町で今は大道になつて居るアソ御徒町の大通りの新道に幽かな住居に世間を狹く暮して何地へも顔出しの出來ぬ様にお成りで夫から体もめつきり弱つて五年前の十一月八日に心臓

病で失くなられました世が世なら葬式も立派にする處だけれど何を云ふにも身代限の始末だから其翌晩コッソリと谷中に葬りまして、アノ貴君さんのお父さんのお墓の側にある小サな石塔がさうで御座いますヨ、そして極内の話だけれど叔父さんが夫でも人の名前にして仕舞つて置た地面や公債が少ゝいあつたので親子三人ぐらゐどふやらかふやら食ていかれたので御座いましたがソレ貴君も御存の狡五子ー慥か御洋行の時はあの子(狡五)が十二で此子(乙女)が四ッでした…私には成さぬ中の義理ある子だから(前妻の子)惣領の事ではあるし叔父さんがなくなつた後は跡に立て私は萬事扣へ目にして居た處が何が扨て二十二と云ふ若盛りで夫ハ〳〵怪しからぬ身持ち私が度〻意見をしても馬の耳に念佛で芥子程も聞入れず地面も公債も一年ばかりの内に人手に渡し住居も道具も八重に抵當に入れてひどい借金を仕ちらかし揚句の果が一昨年の暮に逐電して往衛しれずサアー借金取は方〻から來て居催促其中には義理の悪いお金があるので私は何もかも狡五の借金かたに引渡し忘れもせぬが其年の師走の廿三日に着のみ着のまゝで娘の手を引き出入の米屋の世話で此所へ引越しましたが身に附たものハ身体の外には何にも無いから母子二人で手内職をして其日をヤット過して居りますが有り難い事に私も以前は病身がちであつたが貧乏になると氣に閊みが附て來たせいか思の外丈夫に成りマアお藥もめつたに飲まぬ樣になりました夫に娘が此通り精出してハンケチを縫つたりレースを組んだり仕てとんだ稼ぎますので私が働かないでも食る丈の事は有りますが可愛さうに今年はモウ十八になりますが三年このかた燻り切て表へは出ずお爨どんを仕たり味噌漉を下けて使にいつたり辛苦の仕通し、中にはアノ器量をコウして置くは惜いものだ旦那どりをさするか柳橋にでも出したらお前も樂が出來て宜からうにと申す人もありますが當人はたとひ乞

食見た樣になつても其ナ恥かしい体になるハ否だお母さん一人ハどふかして貧乏なりにも私が稼いで食させるからと申しますので私もソンナラさうと申して今日までは暮して居ましたが實は貴君のお歸りを心待に待て居ました私はモウ先も無い身体だからどふ成つても宜いが娘だけはどふゞして人並にして遣りたう御座います潔さん推察しておくれよと涙と鼻涕を啜りつゝいとも哀れな身の上をなし、清水は始終を打聞て共に涙ふ暮れたりけり。娘の乙女は母が話の中にチヨット表へ出で程なく歸りしが近所で買て來た菓子を袋より出して緣の剝たる盆に載せ番茶の煮花を汲で清水が前へ差出し貴君なんだか可笑な物で御座いますがお一ッお摘みなさいましッシテお母さん愚痴ぢなしは大抵にお止なさいよ貴君が御迷惑で入らつしやるだらうから、ホヽ、、、モウお袋も此節は愚痴ばかり申して困りますドウゾ御免あうばせと涙を袖に押隱し、無理に作つた笑ひ顔泣くに增したる思ひなり。清水ハ思はずも乙女の顔を打見るに髪は油氣も無き引つめの銀杏返し邪見に結んて櫛さへ入れねど毛彩は飽まで黒くしてふつさりと生へ、分て揉上から襟足の所は申分のない髪毛、額の生へ際は一たい濃き方なれどいつが何年にも剃附けず生れた儘なが却て天然にて一しほの愛嬌なり、色は極て白きが上にほんのりと赤みが底の方に見え眉はボーッと廣く眉頭の方太くて眉尻に至りて細く眼は黒目がちの二重まぶち睫毛は濃くて長くはへたるにて大なる眼をば一層凉しく見せ鼻筋は通りて齒は水晶を並べたる樣に麗はしく口元のキリ、ト上つたるに薄き唇の紅なるは花にも喩へがたし丸顔で下豐中肉中背手のつまさきから足もとに至るまで一點の申分ない美人もし美人の共進會があるならゞ此人ならでは東京より出品する女性ハあるべからすと美術家も俗物も與に同論なるべし、此の十五年來西洋諸國の都にて美人の見飽をしたる清水も今この乙女が髪も結はず着物とて

は雑巾にしても惜からぬ木綿中形の浴衣を着て繩のやうなる帶を締めても天性の美麗なるを見て思はずも襟元からゾッとする樣に覺え加ふるに叔母の物語にて孝心の次第を聞き貴くもまた可愛くて、あは れ是程の器量人柄を備へたる處女高貴の奥方となしても不足なきものを斯る草屋にうち棄て賤の男が妻にせんことの悔しさよ我も男子と生れたる冥加には宿の女房と定めたきものをと此時よりして清水は乙女を戀ひ初めたり、稍々あつて清水はお賢に向ひ段々のお物語承つて御氣の毒至極御心勞お察し申上ます併し人は七倒び八起と申せば再び御運の開くる時節も御座らう程に左樣にお氣を揉ませ玉ふナ及ばずながら私も歸京いたしたればお力の居くだけは御相談に預りませう又乙女さんは私が爲には從弟兄同士の間柄どの樣にも力に成りませうから必ず御案じ成さいますなと信切に言ひ慰めたるにお賢は落る涙を押し拭ひ潔さん貴君の御信切な御詞を力に致しますヨ賴に思ふは貴君一人と繰返し〳〵て賴むにゞ乙女も傍より潔さんどふゞ宜しう御願ひ申ますと詞少なに挨拶したり。清水は上衣の隱しより紙入を取出し拾圓計の札を紙に包みお賢の前に置き叔母さん是は誠に失敬では御座いますがお菓子料の印し御收め置き下さいまし實は乙女さんにも何かお土産を持て參らうと存じましたが永の道中の事で心に任せませぬゆゑ斯の仕合と當座の貢の心にて差出せばお賢は押し返し潔さんお止よ貴君だつて旅から歸つた計りで中々入用も多いのに餘計の心配れしで無い夫に私どもは困ると云つてもコンナに大層のお土産を貰ふ氣は無いからお返し申ますと貧乏ハすれど流石に清水が叔母きつぱりと押返し乙女も共に斷はつたり。併し十錢の小遣にも差支へて居る内幕は透き通つて見えたれば清水は笑ながら何の叔母甥や從兄弟同士の中でそんな他人行儀が入りませうか私が困る時には又御無心に出ますから叔母さんマア取てお置きなさいましッ

シテ此の殘暑の酷い内は日中には御内職を少し止めて御身の御養生を成さつたが宜う御座いませう尤も御身上の事に付きましては少し考へた事も御座いますれば何れ明日か明後日また參りませう其中に御用もあらば此處へ郵便を御遣し下さいましと名刺の裏に鉛筆にて旅館の町名番地を記してお賢に渡し暇乞して立ち出でたり。お賢は乙女と共に清水が出行を送りたるに乙女は其姿が見えずなりても猶暫しが間は茫然として門口ふイみニッコリとほゝ笑みたり

○第四回

なる程世の中は分らぬものでは有る古人も飛鳥川の淵瀬の定め無きに喩へたるが實に其通ぢや榮枯その地を變るに從つて其人の心も亦境界に由で變るは是れ當然のを余豈に獨り郡樫藏を異むに及ばんや畢竟我父の舊誼とか舊恩とか云つて父か曾て施したる德義上の恩義を〻恰も其子に傳はるものゝ樣に思つて報酬の義務は彼人が負擔すべきものゝ如くに心得恃むべからざるを恃んだは我か料見違ひであつたよな其にしても我が心事を〻浮と郡に物語りたる事の口惜さよァゝ是が我身に取て善い經歷ぢや、よく考へて見れを十五年前日本を出た時にはマダ二十に足らぬ若ものので言ハ〻丸で日本の事情を知らざる小二歳同前うれから今日まで十五ヶ年の間は難行苦勞に隨分世故を經たる樣なれど是も西洋の事情にこう通じたれ日本ハまた日本で格別の事情あるは當然いかに日本が政治制度文物社交みな表面は西洋風になつたればとて内部の人情風俗まで西洋に成り切た譯でも無からうィデ是からは外國より初めて日本に來た積になつて先づ日本の社會を實地に研究し飽まで其事情ふ通じた上で徐ゝと身を處する計を立つべしと清水は心附きたれを是よりして日本橋の旅館をば暫

しハ已れが旅寓と定め學友同年舊知の人〻が東京に在るものを尋訪たり。其中には曾て東京高等中學にて螢雪の苦學を倶にあたるものあり、又英國獨逸佛國の諸邦にて友垣を結びたるもあり、又の昔し菜種の二葉より生立ちて竹馬の遊を倶にし其後も同じく尋常小學校に入しヤレ卿の學校の讀本は東京府か僕の學校は文部省だ僕の方が讀本は優等だと教師も仰しやつたれば僕の學校にお入りよと勸むれをナンの東京府の方が上等だと教育家の先生が判斷ゆゑ僕の方が善いよと言ひ爭ひたるものもありて何れも純粹の心もて交りたる人〻なるに、十五年を經たる今日に至つて此人〻を尋ね見れば或ハ高等官に昇進し學術は左までとは思はねど如才なき取廻しに長官の受も善く一省に時めきて威權を振へる官員となれるもあり、或は財産も智識も十分には無けれども何なる由緣ありてか東京の議員に選ばれ今では下院の座席を占め將來の首領は乃公を置て誰そやと空頼めに鼻尖を高くとせる議員もあり、或ハ算盤よりは掛引き地道な事では金儲けの出來ぬ世の中智惠を振つて考へたる工夫は常も間に合はぬ唯くと早耳に若くは無し是れ見給へやと言はぬ計りで立振舞ひ内幕ハどふか知らねど會社の創立組合の發起に名を知られたる紳商となれるもあり、或は職を武官に奉じて天ばれ皇國の干城なりと意氣揚〻たるもあり、或は新聞の主筆となつて政治の得失を紙上に判斷するもあれば、或は代言人となつて權義の有無を法廷に辯論するもあり、或は舞踏の熟練と婦人の接待は此人に限る歐洲の本場仕込だけ格別なりと持囃さるゝ縉紳もあれば、或は彼漢の説ハいつも迂遠で物の役に立たぬお負に不人相な面附が氣に喰ぬと可惜器量を有ながら社交に擯斥せられて欝〻くたるもあり、其境界の區々なる千差萬別ハテ扨て人間の生涯は耳朶次第げにや牡丹餅は棚にあり成敗は運に在り阿呆は働け果報は寝て待てと云ふがそうかも知れぬコリヤ理屈通にハ參らぬが是につけても

思ひ出した事があるライプシヒの大學を辭したる時に先生が「清水君ヨ君は既に修學の期を卒へたり日本に歸りなゞ實地研究の期に入るべし其期の苦難は更に修學より一層の苦難を覺ゆべし修學せる所を擧げて其身を社會の奴隷となすも又これを利用して社會の先導者たるも此の研究の如何に關するものゞと知り給へ君よく此語を記臆せよ他日君か老境に臨み後悔の期に入る時に當り必らず思ひ當るべし」と哲學上の豫言を勿体らしく授けられたるは即ち今日の事であらういで〳〵是からは大日本帝國東京の都市に於て社會の實地研究に盡力いたさんが夫にしては社會に入り交るが第一の肝要少〻くぐらぬ氣に入らぬ連中にも附合て見すゞ成るまいと清水は心を定めて流行の社會に入たるが其骨の折れる事は一通りにあらず、葉卷煙草に紙卷煙草は否でも喫ねゞならず、西洋骨牌のウィストが表座敷で花骨牌のヨロンイが奥座敷これが出來ねゞ懇親が結ばれず尤も西洋留學中に少〻は覺て來たれゞ先づ差支は無し、殊に舞蹈ピアノ唱歌乃至お寺の讃美歌これハ拙者が本場で御座る、ナニ君たちのは十年前の流行で今日は瑞典の木曾の奥葡萄牙の外が濱でもモウ廢つて誰もやり手は無ひ只今の流行はこれ此の通りと幅を利する事も出來るが甲の仲間に交れゞ我もうのかみは上界の諸仙たるが往昔のちなみありて假に人間に生れきて楊家の深窓に養はれ未だ知る人なかりしになゞ、調子に乘らぬ道魔聲を出して唐人の寐言を日本語で謠ひ其爲には梅若や寶生に弟子入りをせねゞ相成らざる苦みあり。乙の連中に交ればお炭拜見ナル程感服てげす是か遠州名物の井戸でげすかィヤ定家の歌切は恐入てゲスと狹い數寄屋に四五人も詰込んで穢ひ茶碗で苦ひ茶を飲み主の前では無暗にお世事を並べ其家を出れゞ無暗に荒を言はねゞならぬ苦みゝ丙は解らぬ癖に骨董をひねくつて是が美術の詮鑿に必要なり我朝に希臘風の彫刻既に千有餘載の前に傳はつたるを此佛像の

鼻柱が折れたる所にて其證判然たりなどゝ評せねば成らぬ苦み。丁は相撲に大達の力と劔山の伎とは孰が優れると評し果ては座敷の眞中で座角力や腕押の力自慢戊は團十郎の活歴は菊五郎の時好に匹敵して如何と論じ。已は端唄都ゞ一ゝ酒席に欠べからず我謠をして愉快を感ぜしむるものはわしが國さで見せたいものはむかしや谷風いま伊達もよふゆかしなつかし宮城野信夫と來ちやたまらぬ〳〵と云へば。庚ゝ彼れ田舍漢いまだ高尚の妙を知らず酒は香の物に乾物低い調子で戀せずゞ玉の杯と語るの風流なるを會得せぬにゝ困るいかに野暮でも山崎や賤機の面白い所は分りうるものにと澄し。辛は寄れば障れば相場の相談君あの郵船を蹈だが惜い事をした今度の増株が内〻極つたら何でも鐵道でウンと儲けやうでは無いかと濡手で粟を握まふと云ふ正直ものゝ軍議。壬ゝヨシ玉へ政治論は野暮すぎる大抵にして今夕は例の宿坊に赴かう彼的の音曲は拙いが嬋妍たる容顔一黙の

大德寺ノ一行物ハ
恐入ッテゲス子

新富座ガ見タイカ
連テイッテヤラウヨ

是レ見玉ヘ日本ノ
美術ハ遠ク グリーキ
エジープト

マテヨ此ニハ手ガ
アルゾ
此ニ手アラフ
手水鉢

是ハモロコシ
金キン山ノフモト
揚子ノ里ニ
住居
スル

ドッコイ
サウハ往
ヌジ
ヨット
殘ッタ

ドウモ 煩サイ子
サウハ
カラダガ
續カ ナイゼ
色男ニハ
成リ
タク
ナイ

セイシ
書セタ
茶臼山
ヤードッコイ

塊カヘス
ハンゴン香
名画ノ力カ
アル
ナラバ

申分なしだソレが僕ふ少し來て居る樣だサア〳〵出張〳〵と自分極めの色男揃ひ。癸はいかなる劫か丁々と四丁に掛つて延引ならず堰にせかれて生死の苦しみするのが面白いと忙しい日を啞の合戰に潰さねゞ成らぬ苦み。是ではナンボ修行でも体が續かねゞ根も竭る入用損の日間つぶしコイツ一工夫せねば堪らぬとさすがの清水も茫然として方向を失ひたる如くなりしが……アー日本の社交は六ケしい〳〵倫敦のソサヤチーの方が餘程樂だ

○第五回

さしも十餘年が其間歐洲に留學して世の酸苦をも嘗たれゞ生れ故郷の日本に歸りなば功名富貴は手に唾して得べしと思ひたる清水は此の三四週間の經歷に東京の社交を一と通り見物いたしたるが事々物

々思の外のとのみにてありき尤も西洋に居たる時にも日本では斯くあるべしとは兼て推量したれどもまさかに是程とは思ハざりき、上流の都人士には特有の性質と知られたる君子國の名物日本一手捌きの德義は斯く腐敗したりとは思はざりき、江戸ッ子の俠み膚と云はれて三百年間養成したる義俠の氣風は僅かに二十年か三十年間に其痕跡を絶たんとは思はざりき、義理にも人情にも搆はず己れさへ都合よければ何でもすると云ふ事が開化の當世風なりとは思はざりき、御髯の塵ハ積らぬ先に拂ひ閣下の高論敬服仕ると寵にも媚び奥にも媚び以て榮達の道を計るが世上の欣羨する所なりとは思はざりき、不景氣な顏色を持ちながら美人を氣取り無暗に男子に向つて横柄なるが女權の伸張とは思はさりき、何事もかごとも皆思はざる外の有樣に打驚きては且つ嘆息せしがナニモ是しきの事ゐ恐れて男子たるものが其の宿望を空しくすべき因より覺悟の上なれバ艱難辛苦を凌ぎ通して目的を達するに何かあらんと思ひ直して勇氣を鼓舞したれども其の内心の底の底を窺へば第一等の甲鐵艦が目ざす港に攻め込むに當り水雷の海中に埋めあるに遇ふたるが如きに相違なかるべし、是にても己に清水は前途の遼遠なるを覺えたるに茲に又其心に蟠りたる一種の苦勞は叔母のお賢と從妹の乙女が事なり東京に歸りてより二十日餘り清水は諸方の知人を朝野の間に尋ねたれど其話とてはお世事に非すんば則ち大法螺ばかり口と心の裏表それを誠と思つたら瓢簞から駒、鰻子から虎が出やうも知れぬ危い境界りの席を退くごとにアヽ先づ宜かつたとホット太息を吐く計りなれバ何會何社に赴くとも心底より面白いと思ふ事なく眞に打解けて飾りなしの話とては乙女母子に會ふとき計りなり。然るに乙女母子が朝夕の煙を立兼るを見るにつけ清水は益々不便の念を増し何とかして其苦現を助けたきものと諸事の相談に與かる中に乙女が姿色と云ひ才藝と云ひ申分のない娘ぶり

に心を動かし深く戀慕の情を添たり、一体ならば戀に焦るゝ思をも押包んで穏に顯さぬが男の嗜みと云ふ筈なれど清水は中々左に非らず戀ハ曲ものとは誰か言ひたる不當の邪詔なるず夫れ戀は高尚なり優美なり愛情の由て感發する所なりとて心の丈を打明して口説きたれば乙女は恥らひながらも素より憎からす思ひたる潔が望ナニガ扨貴君さへお宜しくばと眞赤になつたる色よき返事、ソンナラ叔母に相談と出掛けたるに、叔母は娘が爲には此上もなき結構な事なれど卿さんは立派な清水の本家此方ハ今ハ裏店住居、提灯に鐘、釣合ぬは不縁の基ぬ御互の爲になりませぬと斷られ失望の至りとはなりぬ、去れども根が當人同士好き好かれたる中なれやお袋が少々不承知でも何の差支あるべきソンなら貴君がお身の有附が出來た上は。其時こそ立派な夫婦。夫までは何年たつとも。仇な心は御互に。出しはせじと誓つ、深く行末を云ひ替したり

サア斯うなると乙女母子の裏店住居は甚だ以て清水が心中に安からず如何して是を救ふべきと兎つ追つ手段を考へしが或る日の事なりき清水は乙女母子を音信れ容を改めて申げるは、時に乙女さん卿さんふは兼々伯父さん(潔が父の金作を云ふ)から遺物を下されてあるによつて今日改めてお渡し申すとて懐中より紙に包みたる一品を取出し書替の手續は私が直に致して上ませうと述へたり。乙女は何品にやと怪しみつゝ母のお賢と共に包を解て見れバコハそも何に整理公債額面七千圓の證書清水潔と記名の品お賢はあきれて暫し清水が顔を見詰しが潔さん卿さんハ我等母子をば貧乏と侮つて馬鹿ゑする氣か此の公債が何の遺物で御座らうかと開き直つて證書を押し返したり清水はィヤ〳〵戯談でも無く馬鹿にも致しませぬ實の所は父が亡なつて後に用簞笥を改めますと兼て認め置たる書置の遺言狀が御座つて其中に金七千圓は我姪乙女へ遺すべし但し當人十七歳に相成るまで

は潔これを預り置べしと認めて御座りますれば即ち父より乙女どのへ遺しまする遺物たしかに御請取下さりませぇ。左樣で御座いますか併しそんならナぜお父さんが御隱れなすつた時に其事を御披露下されましなんだか、夫は卿さんの御都合とした所が夫程の譯ならどふぞ其遺言狀を拜見が致したう御座る。御尤では御座いますが其遺物の事を直に披露いたせとは書て御座りませぬから今日まで猶豫しました且つ其時直に申さぬのが行末を考へたる父の所存に叶つたかと存じまする、又其遺言狀は外に他見を憚りまする義も認めて御座いますれば御目に掛る事は御免を蒙りまする。さう有ては愈々疑はしう思はるゝ設ひ其日の暮しに困れば迚て理もないのに大金を甥より貰ひ受る事は致しませぬと飽まで受る色なけれを清水は深く其潔白なるに感じ入り、誠にお立派なお心だて恐入つて御座ります去ながら父の遺言を達しませぬは不孝の恐れ良しまた遺言狀を見ぬとても伯父の財産を遺物に貰ふのは姪の身では當然すでに七年前に定まつたる遺物相續法に照しても左樣で御座ります父の財産を其子一人で總領いたし甥姪に分領させぬと云ふ法は決して無い道理、但し狡五どのへは何とも父より遺言が御座りませんから左樣御承知下されいと理を盡して諭したれは、お賢乙女は倶に嬉し涙にくれコレ全く潔が計ひにて態と父の遺言なりと申し做て其財産を分配せるに違ひなし抑も潔が父が不慮の禍に其身を果したる時に夫の山四郎どのが身代を搔廻して許多の財産を押領し其上に身代限の時に潔が預金六千餘圓を倒したる怨さへあるに其怨をば恩をもて報ふる事の有難さよ併し此七千圓は潔どのよりお預り申たる心得にて大切に致し決して遣ひ減しは致さぬ、まさかの時には何時でも卿さんの品だから取てお遣ひなされよと申述べて受納したりける。是よりして乙女母子ハ駿河臺の邊に引越し乙女は女子高等學校に通ひ專ら勉強したり原來子供の折に普通の教

育を受け殊に歌舞音曲の事は天性の長所なれば幾ほども經すして第一と評判せらる、樣になりぬ

○第六回

秋もはや過て冬に向ひ東京ハ流行社會に取てハ多事の季節となりぬ高帽美髯連中の繁忙なる有樣は申すも中々愚なり。……ヤー先日は失敬時に此間の天長節の夜會には君は御見が無かつた樣だ……ナニ九時半から參つて居たとドウシテ逢なかつたらう……君は大方スモーキンルームで骨牌に引掛り肝腎の舞踏にハ顏出を仕なかつたに違ひない……ドウして〳〵彼孃につかまつて例の御高慢をうけて堪るものか……左樣々々昨晩の濱矢良伯の夜會は盛であつたが矢張り政治家連中が澤山で實ハ風流の氣少しサ……明晩の○○公使の舞踏會は賑かであらうヨ君も案内を受たか子……三河臺の令孃とおかり踊て居ては宜くないぜチット嗜み玉へ……イヤ思ひ出した〳〵明日の午後は赤沙汰侯爵夫人の接見日だ是に顏出しでも仕なからふものなら大しくじりだぞ……否々夫よりや明日の午後は麻布苦刺部で藍植令孃の獨吟獨奏がある否でも拜聽に罷出て曲が畢ると掌が痛くなるまで叩かねば成らぬぞ、ヨシ〳〵接見から苦刺部へ廻はると仕やうが一里半の道を二人引の人力で駈廻るは恐入るぜ是が苦界の勤か子……ソウ〳〵來る月曜日の夜の集會は今朝の新聞で見たが差酢世子爵の演說があるさうだ尤も發議者は灰汁墨と云ふ議員だと云ふが大かた租稅問題で黨議の歸着を決する策であらうてナ此所には君は是非とも連ならねバ成るまい……ナンの〳〵君の出身は政略に關係があれど僕なんぞは原來社交から來たのだから貴婦人の御機嫌とりが第一だ……イヤ〳〵其方が餘ぽどつらいよ片言まじりの英語を聞たり調子

はづれのピヤノを面白い顔をして感服せねばならず「日本ではまだレージーを尊教しないで困ります」など、云ふ高慢を承るのは我慢も出來るがソレ不(と妙な手付で指を出し)例のニユウブリッヂのスモール一件だらう僕がソレ伯と一所に向島の別荘に招れた時に來て居た事がカウンテスに知れて――ナニ僕が周旋では無いよ周旋は木挽町の鈴婆だ子問違ては困るぜ――カウンテスが「妾は何もかも知つて居ますよ卿お隠し成さらずとも宜いでは御座りませんか妾は卿のお話しは都て信用いたしませぬ」と一本刺されて悔りしたのサ到底カウンテスの間に引ぱさまつては日清兩國と云ふ譯にハいかず實に僕のヂプロマチストと雖ども閉口千萬サ……怪からぬ事をの玉ふな中〻僕輩が如き所にはお鉢は廻らないよアレ程の事業が甘く往つたのだから極めて夫れ丈けの事は有つたらうが下風に立つものは紅葉館の御祝宴で御拂ひ箱サ……と何の事だか其樂屋には分つて居るならんが門外漢には更に理會し難き談話ハ是れ流行社會到る處にて清水が聞く所なり。清水は見るに附け聞くに附け扨も〳〵淺間しき浮世の有樣かな純潔生活はマダ〳〵日本だけには殘つて居やうと思つたが此樣子では歐羅巴も跣で駈出し亞米利加も甲を脱で降參するであらう併し世を擧て皆濁れりと云ふでも無からう其中には設令純白で無いまでも責ては溥鼠色ぐらゐの地はあるべしと相替らず社交の間を何地此地と吟ひて日を送つたり去れども清水が心掛けて求むる所は見當り難い搜しもの占者に見てもらふたら先づ知れぬと明らめなさい併し永い中には見當るかも知れぬと判斷する方なるべし斯くて清水は辭々として樂まず其身を處するの方向に屈托し其後は餘り外出もせざりしがある日銀座あたりを遊歩したるに一書肆の店に處世眞理と題したる一小册の招牌を見りの書は如何だと其價を問へば定價ハ五拾錢お負申して四拾錢、よろしい一册買ひませう四拾錢

で處世の眞理が分り是から先き四十年生れば一年が一錢とは安いもの併し五分の利息を半年毎に元金に加へて勘定したら幾許になるであらうと詰らぬ事を考へながら其書を携へて旅館に歸り四拾錢の眞理ハどんな眞理ならんと表紙を押し開いて四五葉讀み下し、ハヽー此の先生は韓圖の流派を酌み傍ら倍因の糟粕を嘗むる哲學家と見えるが、ヘンこんな僻說は感心が出來ぬ、……ナル程これは御尤だと獨り語して評してハ讀み讀みてハ評したるが去るにても此論未だ以て處世の眞理と名くるの價直なしと雖ども自ら一見識の凡庸に超出するものあるが心憎き著者は誰やらん標題には烏有仙史とあれども其實名知らまほしと卷末を見れば著作者東京府平民夢野實とは記名して其宿所までも明細に記してありぬ、扨は夢野の著述であつたか、夢野は二十年前高等中學にて師兄の禮を以て交りを結ひし先輩其後西洋で遇つた時には頻に哲學を修めて居られたが程なく日本に歸りしと聞き其後の樣子を知らざりしに今ハ哲學家に成つて眞理を講じて居ると見えるナ且つ著述の言論では奉職在官でも無い樣だが己れの樂みとする所にて純粹の生活を成すとは羨しい事でハある殊に此の夢野ハ我に比ぶれば十とかりも年長なれば學問實驗ともに我に優れ日本社會の研究ハ最も行屆いて居るであらう明なば早速に音信れて教を受け處世の相談をも成して見んと俄に飛立つ如き思を做し夜の明るを竢て平素に無き早起をして朝餐ソコ〳〵に調め旅館を出で小梅の里なる夢野が許にと赴きたり

小梅の里と云へば意氣な所の樣なれど同じ小梅でもグッと引舟の通に寄つては買物は不自由なり出入りは惡し別莊でも建て偶に往けば格別のを金があるなら先づ常住にハせぬ方なり夫を承知で此所に寓居をトしたる夢野實は所謂風流でもなく洒落でも無く詮方なしの詫住居なるべし、ソウとは知らず清水ハ夢野が住居は大厦高堂にハ非

ざるべきも柴門深く扃して大樹屋を蔽ひ風塵を謝絶して清閑を獨占するの家なるべしと思ひ其番地を搜したれど是が夢野の閑居と覺しき所も無し漸くの事にて荒ものと駄菓子を商へる家の老婆に問へば、夢野さんかねソレ向ふに見ゆる竹の垣根について右に廻ると小さな橋が御座います其橋を渡つて左の横町に入ると角から二軒目が夢野さんですと教へられ尋ね當つて見れば表の圍は建仁寺の毀はれたるを繩にて古板を縛つて補ひ門とは假の名まことは傾いたる柱に雨戸を一枚釣りたるを片折戸にし其柱から筋違に庭の柿の木の股に物干竿を渡し只今もし傭の老婆が洗濯せしと見えていかゞの品を乾し出入の邪魔になるも更に頓着せざるか如し、清水いまさかに此家では有るまいと思へども論より證據は門柱に打つたる表札數年の風雨に晒されて板は自然の洗ひ出しと成つたれど墨で書きたる所だけは自から凸く成つて夢野實の三字はアリ〳〵と現はれてありぬ

○第七回

庭は本來自然をかた取つて作るものなれば草も勝手ゐ生へよ葉も隨意に落よ荒るゝと云ふは人間の私評これが即ち自然なり我は其の自然を愛する者にこうあんなれと云ふ見識にや凡そ五坪半ばかりの庭は荒に荒はてゝ霜枯の爲に一層の穢なさを增したり、其昔置並べたる庭石も澤庵押しに使用せられたるか齒の脫たる如くにて枯艸の中に埋れ、三年前に御影が他へ嫁入した跡に直つたる根府川石の履拔のみぞ獨り傲然として竹椽の傾きたる前に横たはつたる、但し其側に立たる芝山形の手水鉢は此庭に惜き品の樣に見ゆれども實は燒石にて お負に鑿が入たる故に敢て二君に仕へずして此家に留存して居るが其中の水は神武紀元二千五百五十八年の夏に水池を洗ひし以來は水

が無くなれば其上に差して今日に及びたるに付き池中は碧苔蒼然として恰も深淵を見るが如き相を顯はし子子其外の水蟲は茲に居を卜してより正しく十餘代の世系を傳へたるべし、此庭を面にしたる南向きの座敷書齋寐室兼帶の一間は六疊敷に一間の床と一間の押入とを付けたり、其普請は初め此家を造營せし時に瓦、中塗、疊、建具まで入れて一坪十圓で大工が請負たる普請これが殆ど二十年に近く成つたる家なれば良しや其間に手入をなしたりとて其見るに足らざるは勿論なるに況や今の主人が引越たるこのかた已に五年に向なんとすれども曾て一度の手入をも成さず毎朝の掃除さへ煩さしとて下女の干渉を謝絶するをの多に於てをや、床の間と云ふは名のみにて壁の中央には山岡鐵舟が書いたる懷素風の草書もて癡人猶斟野塘水と云ふ七字を黒々とものしたるが紙も表裝も燻り布袋の腹見た樣に反たるが少々まがつてぶら下つたるのみ其外は和漢西洋の古本やら雜誌新聞の讀かけ乃至菓子打の明き箱茶盆等を秩序も無く置き並たる自然の物置とは變じたり、幸に押入は古くして且つ破れたりと雖ども二枚の唐紙にて立て切たれば其中は見えねども嘸ぢむさからんとは推し量られて餘あり、主人は年の頃四十三四と覺しくて眉太く眼鋭どく鼻も口と共に大くて頰骨の高く顯はれたる痩顏、髮の毛は三錢を奮發して苅込たるより既に三ヶ月餘を經過したれば後の毛はゾロくと襟の中に入る程に延び前の方へぶらくと額に落ち掛りて餘程氣味わるさうなれども當人に取ては更に然らずと見にて平氣なり、髭は頰から鼻の下あごに掛けて一面に濃く然も不揃に生えたるが誰も拂ひてが無い證據にはお髭の塵は言ふに及ばず今朝きこしめしたる味噌汁も干乾びて平張附き鼻涕をかみたる紙屑も少々は其痕跡を止めたり、午後五時ぢかんなる琉球紬の小袖の上に袖口のきれたる黒魚子の綿入羽織を着し机の上は書ものにて餘地なき迄に埋めたるを搔退け唧かべかり

の空地を作り其上に草稿紙を廣げ頻に考へては頻に書て居たるが今しも客が尋ね來りしに付き机を少く側に押よせ今戸燒の手あぶりを主客の間に出だし心うち解て物語してありぬ此の主人は即ち烏有仙史夢野實にて客と云ふは清水潔なり

ナニ僕の境界が羨しいと何の羨しい事があらうゾ世の中にて成まじきものは詩人、畫師、音律師、哲學者、小説家なりと先哲が云はれたが實に其通り僕もフトした事から此の魔界に迷ひ入り或時ハ一部の小説を草して時勢を嘲り或時は一篇の詞賦を作つて世上を諷し以て得意なりとはすれどもヨク〳〵考へて見れば社會の爲には何の利益も無く自分ハ取つては世間に惡く思はるゝだけが損でヤット一膳のお粥に露命を繋ぐだけが儲け差引て見たら損が殘つて儲なしであらう所謂る聖世の廢物とは僕が事で御座る、清水君よ君は抑も此の世の中よ何の不平あつて故さらに此の廢物の仲間に入らんと望み玉ふかヨシ玉へ〳〵今日爲す事あるの時に生れ爲すべきの學藝を修め又爲すべきの才能を備へながら盡く之を棄て畸人にならうとは實に以ての外の料見違ひ君には不似合な御分別ぢや……成ほど社會の顯象が否でたまらぬと夫ハその筈さ此の日本今日の社會ハ清水が爲にも作らねば夢野が爲にも作つたるに非ず自然の發達でかう成つたのだものを御同樣の氣に入らうが入るまいが何と仕方が有るものか子君もし一人の力を以て此自然に敵對ひ社會の顯象を破壞して新に君が望の如き社會を創始し得べしと信じ玉はゞ風潮に逆行するも可なりサ、それが人間業にて出來ぬと悟つたならバ風潮よ順行すべしサ、尤も風潮に順行すべしと云つたからつて何もかも世間のする通りにせよ善惡是非を擇ぶに及はずと云ふ譯では無い風に逆ハず潮に激せずして揖を取り帆を操り終にハれのれが目ざす所の彼岸に着して目的を達するが是れ社會の海上を航する趣意ならずや、然るを己が思ふ通りに社會を仕

て見たい夫が出來ずゞ社會を出離したいと云ふ一刀兩斷の決心ハ愉快には似たれども極端から極端へ奔る氣違沙汰君の決心とも覺え申さぬ短氣は損氣で無いかいナとハ即ち此事でござる……左樣……奮發して立身の策を建て玉へ森羅萬象みな是れ君が爲には立身の地なり……官員、夫も宜からう……商人、よからう……製造工業、同くよからう……何でも君が是ハと思ふ事に其身を置て御覽じろ案じるより産は安い岡目で見た樣ナ物でハ無いものダ一徹に否と思へば否だが其否ナ中ふも亦た面白い事がある故に苦中の樂み樂中の苦みと云ふでハ無いか君が如きハ彼の食はず嫌ひと云ふもの苟くも清水潔とも云はるゝ大丈夫がソウ社會の顯象に怖れては往かぬ千辛萬苦を凌ぎ通す氣力あらゞ社會の顯象何の怖るゝ所かあらん須らく勇進すべしと懇〻說得せられて滯水は大に失望したるがヨク〳〵考て見れゞナルほど先生の高說の如く到底超然として社會を出離する事が出來ずは社

欠

MISSING

何を推究し遂に其功は伊太利人の力に出でたる證據を一〻に擧け東西の書籍と遺跡とに照して一部の著書を出版し然のみならず伊太利政府の依囑に應じ同國にて是まで六七百年間東洋諸國との間にて往復したる公文を譯して差出したる功に依り勳章を賜はつたる程で御座れば實は是等の證狀ばかりで別に試驗を受るには及ばぬ筈なれど試驗官が併し一應は試驗を致すと申さるゝから其は固より願ふ所なりとて其の試驗を頂戴いたしましたが何が扨て獨逸大學の卒業試驗を顧れば與し易きのみサ夫に試驗官に選べれて威儀を整へて臨席したる先生たちを見れバソレ先生も御存のフランクホルトで何時もく不出來ばかりして皆が嗤つて居た長來氏が首席を占め、其次がオックスホルトで三落第と異名を取つたる鈍井氏、其次ハ僕ハ知らぬが何でも東京の法科大學で卒業した解部氏但し此人は西洋に行て官ハ取らぬが一番學術は確さうな人物、其次が米國留學生中で誰も知らぬもの

も無かつた玉突名人の賭川氏其次が法螺協會の幹事で自稱術數家の茶良鉾氏で御座りました尤も委員長は御承知の May Be 大博士此の大博士は議論に詰められて窮すると流石に僕が過つたとも云ひ兼る負惜から何時でも少聲にてメービー〳〵と言ふに由てメービー大博士の榮位を明治廿八年に世上より賜はつたる先生なり)右の連中ゆゑ中々試驗ハ面白う御座りました僕が試驗を受けた箇條はナニ平〻凡〻で詰らなかつたが他の出願者が續〻と出掛けて一〻試驗を受るのを傍聽して實に腹の皮をよりましたぜ、先づ口頭試驗と云ふが試驗する人も人なら試驗を受る者も者で其の問答は奇〻妙〻右にはづれて問へば左にはづれて答へ虚〻實〻の駈引西洋各國入亂れの辯論は左なから禪家の問答の如し加ふるに西洋の語は英佛獨の三國語ふ羅甸希臘を交へ日本の語い東は津輕八法外が濱西は隼人の薩摩潟七十餘ケ國の方言が勝手次第に出ますれば若し語學者が耳を澄して聞たなら

「邦語は凡そ八十餘種語音は三百六十餘種ナール程日本ハ貧乏とは云ふものゝ語音には實に富で居る國だ羨しい」と申すで御座りませう、斯樣に種〻薩埵の人種が皆いづれも高慢の鼻を尖らし雄辯の訛音を振ひ問へば答へ答ふれば問ひ天晴なる振舞は誠ふ比類なき見ものでご御座りました夫から筆記試驗の答辯對策に至つては更に一層れもしろいのが澤山に御座りましたが一〻お話も出來ぬ位ゐ新聞紙の口調を借りて簡短に申さうなら「人〻各〻一家ノ語法アリ一家ノ文法アツテ各〻獨立ノ文章ヲ作レルガ故ニ百人ノ受試驗者アレバ百樣ノ語法文法ヲ以テ其文章ヲ作レリ而シテ其文章ノ燦然タルト否トニ拘ハラス日本文ト名クルニ於テ我輩ハ敢テ之ヲ然ラズト云フ能ハザルナリ何トナレバ其文章ハ不束ニセヨ不出來ニセヨ意味ニ不通ナルニセヨ試驗官ハ之ヲ認メテ是レ日本ノ文章ナリ是レ我等ガ平日ニ草スル所ノ文章ト同種類ナリトシ以テ曲リ狀ニモ日本全國ニ通用ス可シト斷

定シタレバナリ」と云ふもので御座りませう若も春の屋おぼろ氏か誰かに眼のあたり其樣を見せたなら其實況を寫したでかりでも一册三百ページで上中下三册の滑稽小説が一部出來ませうよ、老輩の話を聞きまするに十六七年前に文官試驗規則を初て實施せられた時には試驗も中々嚴重で請謁などゝ云ふ事は當時藩閥の積威が有つた時でさへ微塵毫末も行はれず洵に方正公平で有つたさうで御座るに明治三十六七年の今日ふ至つて斯く相成り曳白少年でも紈袴子弟でもサッサと試驗に及第が出來るハ不思議の世の中これが社會の風潮で御座りませうよ但し僕は幸ひに及第しましたに依て夫から愈々官員に成れる丈の資格を備へる人物と折紙が附き夫から住込の一段と成りました

○第九回

夢野は話の面白さに頗る奇異の思を成し、ハーさうで御座つたか夫から貴君はどうなさまたナと問へバ清水は吸さしたる煙草の短かくなつたるを右の拇指と人差指にて摘んで手あぶりの灰の中に葬り烟管をばハンケチーの端にて一寸ふいて烟草入の上に置きヘンと咳拂し、サア先生これからが肝腎の本文で御座る扨て右の試驗で僕は高等官の候補たるべきものと鑑定は附たが何れの官衙で僕を使用すると云ふ當も無に由て彼是と見廻したるに幸ひなるかな僕の學友が當時某大臣の秘書官を勤め亡父の知己の者も其省では幅を利せて居るに付き先づ此の縁を求むるふ若かずと思ひ付き漸々の事で大臣閣下に拜謁の榮を得たが此侯には即ち大臣を云ふ是まで夜會で兩三度お目に掛つた事もあるし極めて寛太の政治家ゆゑ先づ話は出來さうに成つたが是に引替へ次官の男爵先生は判任十五年奏任十年勅任十年と鰻

登りに登り此省の事はおのれが鵜嘴ちや一寸見た計りでも此書付は誰の草稿で寫字生は誰だと云ふ事まで分ると乙な處に自慢はすれど重大なる事件に出會へば是と云ふ分別は出ず其癖定規定例の細い事なら楊枝の尖で重箱の隅を浚はうと云ふ代物で表べには德義を飾つて邊幅を修むれども一皮はげば眞の俗物で鼻もちのならぬ人物サ、長官が使はうと思つても此の次官の眷屬が省中に網を張つて居るからには迚も一通りでは濟込ことは出來がたい所を不思議なる仕合は巢鴨伯爵夫人の弟染井と云ふ仁が七年前西洋留學中パワリアで大病に罹つた時に僕がベルリンから駈附けて凡二月餘も晝夜看病して漸く全快した事があつたのを大層に悅び今度僕が奉職し度いと云ふ事を聞き夫人が態々其弟の染井氏(今では某省の權威家)を僕の旅館に差向け斯々の次第と聞かれ報酬の積りで大周旋勿論かの夫人はソレヲ彼の筋の關係はあるし其上に伯爵は御一新の御三家金紋先箱の藩閥と來て居るから忽ちに周旋其功を奏し重箱次官も委細承知の二ッ返事で清水潔に御用がある、○○省參事官に任ず、奏任四等に叙して上級俸を賜ふと云ふ宣旨が天降つて昨日の書生は一足とびで高等官マアゐらい立身サ尤も夫人の方へは直さまお禮に參上して今般の儀は全く北の方の御蔭御恩は一生忘れませぬと厚くお禮を申述べて相濟だが相濟まぬは學友知己左までの盡力も無いに御禮の贈物は先方から御催促それも仕方が無いとした所が同僚の懇親を結ばねばならぬとか屬官にも近づきに相成るべしとか入らざる御注意で或は水ッぽいビールを飲で謟諛の席上演説を並べたり或は紅の輪廓を附たる蒲鉾に栗きんとんのお料理で調子ッぱずれの端唄を拜聽したり揚句は詰らぬ議論から酒の上の摑み合ひ婆藝者と其家の女房の取押へて仲裁とは成つたれど此方が其夜の主人だけに翌日は双方に行て首尾を取繕ふ始末ソンナコンナで札は鵞毛に似て飛だ散財し人は溥情を見て達

て後悔ずと云ふ有り難い仕合これが即ち清水潔が人間の下界を離れて青雲の上に昇つたる時のこと

サア是からは我も高等官なりィザ學藝才能の程と事務の上に顯はして見せんどさんなれと腕によりを掛けて出頭し萌黄羅紗で張たる大机を前に据ゑ小豆皮の大椅子に腰を掛け右の方には硯箱左の方にハ御用箱サア來い御座れと一身の全力を集めて待て居れど何も來らず午前九時より十時十五分までの間は廣ゝたる參事官室の一間に只た一人雙眼をパチクリ〳〵して默座したる体ハ質に取られた啞の如く煙草も已に吸飽たれば溜り溜つた溜あくびは一度にアート出にけり。給仕の少年は次の間で此欠を聞付け敏捷にも手に二三枚の新聞を携へて机邊に來り是だけ廻つて來ました日ゝ新聞と時事新報はマダ檢査掛の手許で只今ポチ〳〵最中で御座りますと告て退いたり。これハ添ない實は今朝出勤がけに毎日新聞の法律社説をチョット見た計りであつたと云ひながら其新聞を見れバナル程朱にて所〻にポチ〳〵と點を附たり又は圈を施したり或は行ごとに竪棒を引てありぬィカニ檢査掛が文章家なれをとて新聞の文章に批評とは恐入ると思ひながらよく見れバ文章の評とも思はれず記事でも議論でも其省の事務か又は其省の官吏に係つた事柄だけに朱を附けたりコレハ〳〵御丁寧の御注意ろの中に「〇〇省の參事官清水潔氏は昨夜獨逸學會に於てチュートニック人種の事に付き一場の演説をなせり但シ此稿を印刷に附する迄は未だ其演説を畢らざりしに付き筆記の概略ハ明日の紙上に讓る」とありィヤ拙者が事なら是ほどの御注意にハ及びませぬと獨りで可笑がりしが又れのれと己れに向ひ、アヽ潔よ潔よ卿は憫むべき身になられたり卿が一言一行は此の通り新聞に載るが最期すぐにポチ〳〵を附らるゝ此ポチ〳〵は卿の進退に關る標にて若しも長官殿の蟲の居所が惡いと此ポチ〳〵は卿が旨を諭さるゝ因由となる

べきゾと且つは弔らひ且つは慰め少しあぢき無い心地せられたり。稍〻時も立つて十時になれゞ次官御昇省の知らせとして給仕は隅に掛けたる次官の札をクルリと前に向けたり直に總務局に至り今日の御機嫌伺ひは恐らく此の清水潔が一番鎗ならんと思ひの外局長やら書記官やら四五名は既に疾くも其御機嫌を伺ひ畢りてありぬ次官男爵は大なる手提の皮箱を鍵にて明けながら此方を向て「フー清水かドウだナ」の一言を賜はつたり側から見れば此の一言は餘程特別の優待と見て中には羨しいと云ふ顔色をしたる人もありし、斯くて再び參事官室に戻つて見まゝ僕が同僚前輩の參事官二人ほど只今しも出勤して各〻其座に就き……「ヤア御早かつた僕は今朝早く大臣殿に伺候して夫から某省に廻つて來た……左樣か僕は出勤しやうとする所に某議官が來て議案の相談で今まで掛つたと忙しさうに書物の包を解たり用箱の蓋を明けたりして罫紙に書て綴たる書類を幾通となく机の上に堆く積み一々これを覽る樣なれど實は左までの事では無いと見えてズン〳〵と檢印を押し左の手に一纏にもつて僕に渡し「サア清水君これに小印を押し玉へ尤も君に意見があるなら提出し玉へ、だが大抵常例の事で已ふ僕が印を押したれば君は別に見なくても小印を押さへすれゞ宜しい」と極〻無造作なる御示し然らばとてポケットより小印を出して押し初めたり此の小印は奉職と極つたる時に中井敬所に誂へて拵へたる銅印にて此印は苟くも人民の休戚國家の利害に關するを以て是を押すには最も注意せざる可からずと案じたるに斯く譯も無いものとは思はざりき、他の一名の同僚は僕を呼びて「清水君この一通は御注文だから異見を容るゝ可からず、此の願筋は少々をかしいが深き事情あり敢て犯す可からず、是は今以て僕等の處に何たる沙汰も無けれゞ暫らく留め置て樣子を探るべし其間は異議も云はず同意もせず曖昧にして置くが肝腎なり」とて書類を渡し「此外は異存があ

るなら陳べ玉へ無いなら無いで宜し君の御都合次第とてはふり出したるは中々事務に慣れたる手際なりき

○第十回

清水は更に語を繼で……先生お聞き下され只今申たるが常務で御座るソコで右の書類に官判をサッサと抑して机の片隅に積上げて置くと屬官先生が室内の入口で丁寧に一拜して我等が机の前に進み來り凡そ四十二度半の角度ぐらゐに腰を屈めて頭を下ケ「御印ハ相濟まして御座りますか」と恐る〳〵伺ひ奉ると此方は傲然として「左樣、撿印して御座る」と答ふるハ僕が新參ゆゑ餘ほど鄭重なる答振ドウして〳〵古參の向に至つては頭を一寸と出してソレ其處にあると仕打で知らする計サ、屬官は夫を請取つて拜し再び入口を出る時に拜して退き夫から其書類を何れ向々へ送付するで御座らうが其は我等が知る所に非らず、兎角する中に十二時の午砲が聞ゆるを合圖に給仕は我劣らじと先を爭ふて土瓶に茶を入れ(尤も某省では此節の經費節儉ま付き白湯を用ひますれど幸ひに僕が省では一斤十錢の茶で御座る併し屬官の向は麥湯かも知れませぬが)黑塗の盆に茶碗を添て持ち來り差出すに付き用意の辨當を食ひ畢り茶を飲み紙卷莨を吸ひ楊枝を遣ひなど緩々として時刻を見ればマダ一時まへ是から退出までの内には何か用が出て來るであらうと待てども〳〵其出て來ぬ事は日本橋區の眞中で白晝に幽靈の出て來るを俟つが如し同僚の二人は御互に心安い同士なれば色々な話をして退屈の時間を消すれど新參ものゝ悲さには馴染は薄し話は無し机に向つて欠を飲込で居るばかりサ用が多くて目が廻る樣に忙しいも苦しからうが扨て何にも用なしで六時間のその間默つて居るは更に苦しい古人が無事に苦しむと云ふ事は此時

はじめて其情を覺りました彼れ是れする中に三時前二十分になると同僚が「サア清水君退出の支度を仕やう」と注意して呉れるから僕も同じ樣に書類をカバンに入れたり机の引出に錠を卸したりして待て居ると時計がチン〳〵と三時を打つ給仕は來てカバンを請取り辨當の空箱と共に持て玄關にゆき大聲で甲樣の御者、乙樣の別當、丙樣の車夫と呼出して渡す、玄關の石段を下りて車に乘る時には玄關番が脫帽して敬禮する門を出る時には門番が敬禮する中々威嚴赫々たるもので御座ると物語るを聞いて夢野はムー夫でハ餘り樂すぎる樣ダ新聞記者の惡口に高等官員は小印を押す器械なりと云た事があつたがマサカ左右ばかりでハ有るまい少しは廉立つた用が無くては成るまいにと不審ずれを清水はサア只今申た所は先づ通例の常務で此外にも時としては重要の職務が御座りますゥの重要の職務は如何に。總務局の屬官が參つて皆樣直に總務局に御出頭ある樣にと次官樣の御沙汰で御座ると觸れ廻る、心得たりと室を出で總務局に罷り向へば諸局長次長書記官參事官いづれも總出仕の大評議、次官エキセルレンシーは議長の資格を占めてエヘンと咳拂し、扨て此程から廻覽に出したる○規則には大分各方にも意見が有る樣子で附箋をも一ト通りは閲覽したが今日の會議で決を附けやう一体この規則は大臣と余と相談して秘書官に命じて取調べさせ余も大臣も度〻評議を盡した上で是ならば差支は些少も無いと存じて回議に出した譯ゆゑ別に各〻方が異論を挿む點は無からうに……併し意見があるなら遠慮ハ入らぬ十分に陳述なさい……ナニ言論の自由は素より僕の欲する所なりと仰を承はつて座中の面〻互に顔を見合せ同意を表したる連中はソレ見たかと云はぬ計りに得意の色を現はせども異議を容れたる輩は只今の演説を聞て胸ドキ〳〵、扨はッウで有つたか夫なら餘計の議論を附箋に書なかつたものをと醒ての上の御分別、後悔さきに立たず、とは云へ

一旦書面にまで書たものを今更あれは書損て御座った校正の誤りて御座ったと無神經の取消に倣ひ棒を引く事も出來ずドウかして胡魔化うと塗抹ほど猶うの痕跡が見えて頗る心配の仕合、次官は夫と見て取りナニサ大臣の説ても次官の論ても不服の廉は憚りなく申されて宜しからうと言ひつゝ附箋を見て、英局長は大さう此の第三條に向つて攻擊しられたが日本よは日本の習慣あり敢て盡く英國に摸擬するには及ぶまい、沖手書記官は同條の末項を以て民法に撞着するとの意見なれど其民法も……ナニ其民法も早晩改正すれば差支へあるまい……改正は出來るとも〳〵是程の規則を出すにハ是に關する民法の改正ぐらゐハ容易に行はるゝと見定めて掛らねば相成らぬ……イヤ〳〵大佛參事官はマダ佛蘭西の規則を知らぬと見えるナ佛國では千八百九十一年維廉第三世の敕令で（ト聽かぢつたる事を説に掛ると秘書官が側から小聲にて、イヤ佛國では御座りませぬ獨逸で御座りますと注意するに次官はコイツ失敗たりとは思へどもぬからぬ顔にて）ソウ〳〵獨逸では現に是を行なつて愛蘭（秘書官が、フランクホルトと注意する）左樣そのフランスボルトに施行して實効を見たでは無いか……早鞠次長が法理論で第五條を押きらうと思ふのは不都合千萬サ兎角に法律家は權利義務とヤカマシク論ずるが何も是が府縣會議員が監獄に往て囚人を取調べると云ふでハ無し大臣が是くらゐの事をするのが越權では有るまいと一々に辨明せられて、ナル程〳〵閣下の御高説の通り至極左樣で御座りますイヤ其處には氣が附きませんで御座つたと詰らぬ説に感服して逐條みな原案の通りに同意する偶々一二ヶ條は何方でも好い事をサモ重大らしく言ひ爭ふと次官が之を聞てソンナラ斯樣に修正すれバよからうと發議すれバヘイ〳〵其通りに相成りますれゞ結搆て御座ると忽ちに雙方が折合ふとは奇妙の至りサ昔し漢方醫者を冷かしたる笑ひ話しに「或時に兩人の漢方醫者

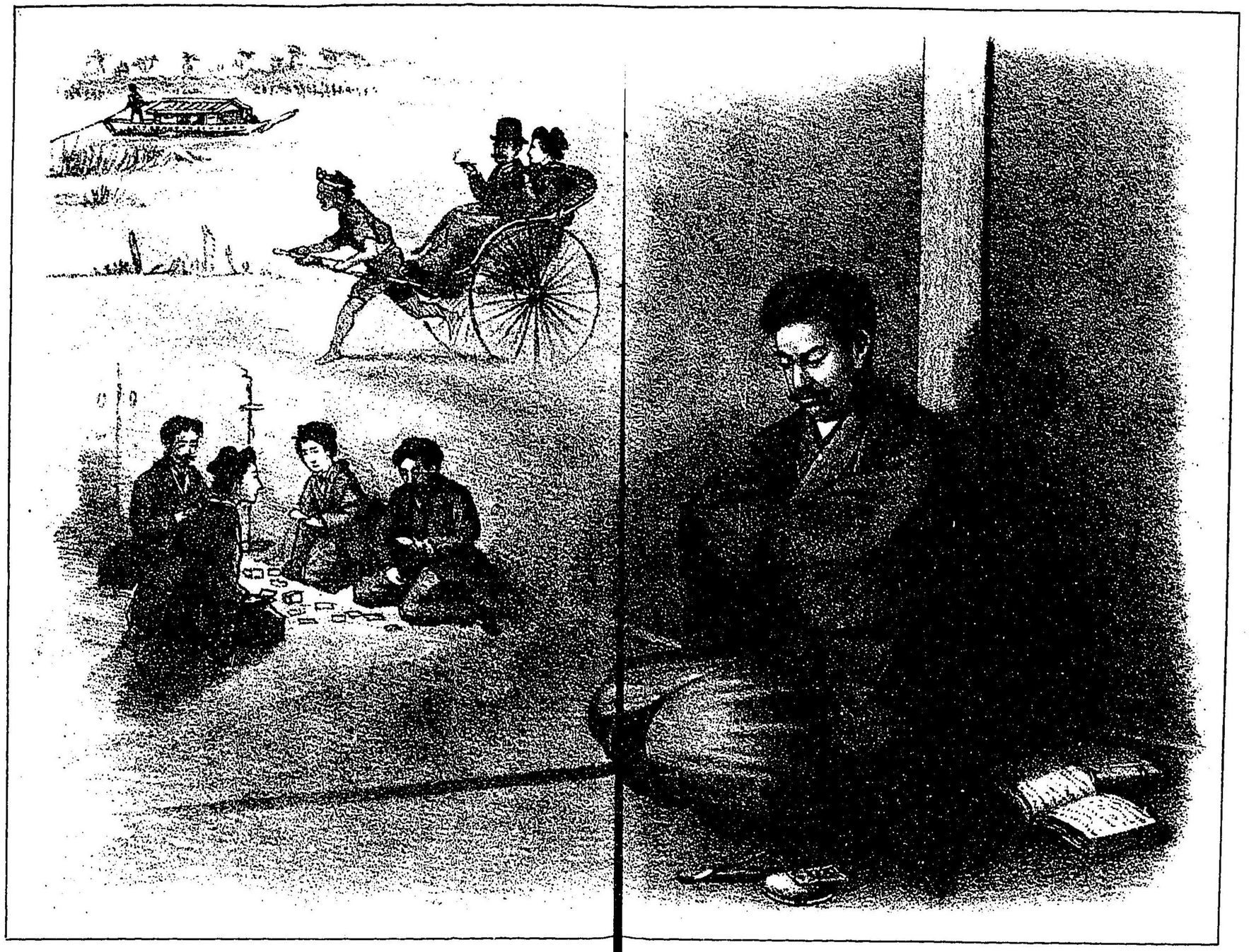
が立合て配劑したるに甲は陳皮を加へ樣と云ふに乙はイヤ〳〵橙皮でなくては其効を奏せぬと論じ、イヤ陳皮イヤ橙皮と陳橙の大議論に時を移したり其時丙の老醫が來つて兩説を聽きサレバサ兩老のお説は俱に其理ありダガ陳皮では甘緩に過るの恐ありト云つて橙皮では辛急に失するの慮ありソコで愚老の考には橘皮を用ひて見たい陳橙の問を得て宜しからうと云つたれど甲乙ともにイヤ恐入つた成ほど橘皮ならば最も適當で御座らうと詞を揃へて同意した」と云ふ話が御座つたが次官のお説に敬服して折合ふ所は正しく陳橙の橘皮に於けるが如しで實はどふでも宜しいを笑には笑はれず獨でおかしさを忍へて居たは實に苦しう御座つたが是も度々出會つて見ると仕舞には可笑く無い樣になつて來ました。うの代りに又御英斷も恐ろしい時が御座る大臣次官列座の所で某を呼出し時に貴公は永らく西洋に居たが斯く〳〵の場合にハドウするかノーとのお尋ね、左樣で御座る英國では云〻佛國では云〻獨逸では云〻と事實六割推測四割で滔〻と建板ふ水を流すか如くに辯ずると、イカサマ各國でハ其締りが附て居るのそんなら獨逸を基にして英佛の宜い所を取り我國目下の事情に適當もる樣に早〻取調べて見せい尤も御雇の顧問ワイスニヒトやノンセンスにも相談せよとの御内命畏りましたと取調べ差出すと右の省中會議で直に極まり内閣の會議を通つて忽ちに議院に下附と相成り西洋各國では十年も二十年も乃至五十年も掛つて實際に明るい老輩が討論しても極らぬ事が早くて三週間遲くて二月か三月の中に法律敕令と相成るとは先生ェライでは御座りませぬか是には西洋の政治家と雖ども舌を卷て閉口いたしませうよ

○第十一回

夢野は聞て大に興に入り、イヤ面白い〳〵官員の境界省衙の内幕少々

は聞かぢッて居たが貴君のお話しで其實況を目に見る樣だァ、獨りで聞くのは惜いものだドウだェ一夕どこゞへ小説家の腕き丶兩三名を招いて貴君が此話をして聞かせ小説に書せて見たいナと云へば。清水は苦笑して先生戯談でハ御座りませぬッンナ事をされて溜るものか是とう清水潔か前途に鐵壁を設けて身を立つる事が出來ぬ樣に相成りまするとに眞顏に斷つたるもをかし。夢野ハ笑ながら、併し清水君官員の勸めが夫位で濟むならば何も辛抱が出來ぬ事は無い筈ぢや其を辛抱か出來ぬとて鳳凰池を棄て下界に歸るとは貴君に不似合でハ御座らぬかと話り問はれて。清水は愁然として云く如何にも一ト通りお聽なすつた所では僕が辛抱甲斐の無い樣に思召さうが扨これから官員交際の内幕をザットお話しやませう成ほど夫では尤ぢやとお悟りなさるに違ひないマァ斯で御座る百五十圓二百圓と云ふ高給を取るものハ格別だが僕等が如き下給でも奏任官と名が附けゞ痩たりと雖ども馬一匹毀れたりと雖ども人力一輛は所持いたさねばならず(但し人力は車夫の法被だけ拵て置き賴み附の車夫に着せて手車の積り、馬ハ一ヶ月七圓で仕切てある故に實際ハ馬や車を常備して置くには非ざるべし)加ふるに赤十字社、地學協會、國家學會、佛學會、英學會を始とし女子教育の奬勵もあまば貧民救育の病院もあり其外噴火、洪水、地震、大火難、船、海嘯およそ天變地異あるごとに義損金寄附金は否でも應でも醵出せざるを得ず若しもぐずく仕樣ものなら妙な所の御機嫌を損なふの恐あるを以て御多分には漏れませぬが浮世の附合ひ是ばかりで月給十分の二は掛る。夫れからして西洋服も入れば日本服も亦皆無では差支ゆる。同僚其地の附合ひで或る時は馬を新柳の橋畔に繫いで章臺の花を詠め又或る時は船を墨陀の河上に棹さして北里の燈籠も見ねゞならず尤も親友ばかりで遊ぶなら僕も得意だけれど詮方なし

のお供でイナナマ(田舎もの)を生意氣の略語)を拜見するは實にたまらぬ譯夫が下つて來ると神明、赤坂、四谷、牛込、湯島、下谷、向島に至るまで直段が安いと聞けば直くに實地研究の御相伴イヤハヤ鼻持が出來ぬ。それも辛抱した所で清水ドウダ一組引かんカと碁石の勘定、コレ其櫻を打つ奴があるものか末は赤ぢや無いか、エー氣の利ぬ男だイツマデ松の上を握つて居るのダと頭ごなしに小言を言はれた上で替環を遣はせられ何時もく敗北をかり、僕は下手だから御免を蒙り度いと云へばドウモ君い附合が惡い是が出來いでは紳士の仲間へは入れぬゾ一足飛に沙彌から長老になれるものか客な事をの玉ふナ贅古料と思つて出し玉へと權柄づくの脅迫で遂に御夜と相成るは珍しからざるを夫や是で月給は底を叩て無くなりお茶屋の拂が持出しとい有り難い仕合なり。右の辛抱もまづ我慢が出來るとした所が此外にマダく嫌な事が澤山ござる同僚の高慢や先輩の手柄話し惡く其鎗先に掛つて



御覽じろ齒が浮くとも臍が廻るとも夫ハ〳〵言語道斷大變至極の譯、コウ〳〵清水君ハ西洋に永らく居たから十分に御存であらうが英國の自治制は實に完全を得たるものでは無いか我國で明治二十一年に制定の市町村制ハもはや施行以來十餘年に相成り大に改正を要する所があるに依つて及ばずながら僕が内命を奉じて凡う實際に知り得たる所を取調べ改正草案を作ッて提出するとサア閻王ヘアノ生利書記官等が地方自治だか死法無智だか何の譯も分らずカオンチーもポローも知らぬ癖に少しばかり鰻椅先生や無駄印博士の講釋を聞囓つてヤレ倍愛倫國では町村制が斯樣〳〵ヤレ漢堡では市制は云々で御座るから日本帝國でも左樣なくては相成りますまいと利口氣に說を立て頻に僕の立案に向て批評を入れんと企つるとは扨々其力を量らざる愚物で實に抱腹極まる然るに世間の盲連中には彼等も僕も同等に見做されて居るとは遺憾千萬浩嘆に堪へずと云ふもあり又清水君は

西洋の水が染込でる丈に却て西洋の臭味が薄いから話も仕よいが西洋歸りの若手には甚だ閉口いたすヨ英國か米國かの學校で卒業した に違ハ無からうが卒業したつて其の學問が屹度役に立と極つたものでもあるまい殊に官省の事務と云ふものは自ら例規があつて是を知らねバ事務も辨ぜず又實は人民の爲にも成らざるに彼の若手等は西洋歸りの勢ひで石磯の匂をプン〳〵振り廻し、ムー夫が佛蘭西で斯うする、ヘー彼が以太利ではかく取扱ふヨなどゝ知つたか振りの物識自慢ナンノ日本の慣習に執所が有るものか野蠻の遺風封建の殘物は更に存するふ足らずドシ〳〵と打破つて新たに法律慣習を西洋の通に拵へねバ日本を歐米にする事は望まれぬと遠慮もなく吹立る所は丸で佛人が東京に來て政治でもする樣な心持コンナ若僧どもが時節とは云ひながら政治の要務を專らに取扱ひ我等ごとき老輩が役所の隅の方に押し付られて居るとハ扨〻嘆かはしい次第ぢやと愚痴をこぼすもあつて思ひ〳〵の不平たら〳〵、ソレを一〻成る程御尤千萬至極御説の通て御座ると程よく受げねば先方の機嫌を害ねるしエ、面倒くさいと云ふ顔色でも見せ樣ものなら忽ちに清水は何黨ぢや潔は何派ぢやと星を附られて讒口の禍ふ罹るは的面ヤレ〳〵恐ろしい身の上むかしの人が藩閥なき、官吏ば綱渡ずるが如し何日何時落るも知れずと申したが今でも猶その狀勢なきに非ず斯る馬鹿地金に利口鍍金と云ふ先生たちの御託宣も唐人の寢言老人の小言と聞き流し左の耳から右の耳へ拔かして仕舞へバ辛抱も出來やうが辛抱の出來ぬのは貴婦人の御機嫌とりで御座る、先生の思召では清水卿ハ西洋で十五年が間女性の御機嫌を取り習ひ、ヘィお上召私しが持ませうドウゾれ手を掛け遊バして下さいましサァお車にお乘り遊べせ私を御遊歩のれ伴に仰付らるゝ樣に願ひ上げ奉りますと貴嬢は世界第一の御器量で入らつしやりますドウして〳〵貴夫人の姿色才智に立並ぶ婦人は決し

て御座りませぬなどゝ凡そ婦人に對しては追從輕薄世辭諂諛數の有たけ言ひ盡し仕盡したる實驗があらう夫に日本の婦人に向つて其程の勤が出來ぬ事があるものか日本の女性の方が蜀黍よりは遙に柔和いぢとの玉ふで御座らう僕も實ハ左樣に思つて居た所が大違く西洋の女性ハ胎内から女を尊敬すると云ふ風儀の所で生れ其風儀の中で教育られたる女ゆゑ横柄の中にも鄭寧あり倨傲の中にも愛嬌あつて如才なく立廻りますが日本のはツレ子申さゞ俄富限の一夜レージー男女同權の勢ひハ磐梯山の噴出したる如く女性尊敬の望は利根川の溢れたる如く矢も楯も溜らず恐ろしいとも〳〵併し餘り饒舌まして婦人たちに憎まれてハ堪りませぬマア是くらゐで置きませう先生よろしく御推もじ〳〵

○第十二回

官員の内幕話の始終を聞き夢野は成程と云ふよりも寧ろ面白いと云ふ顔付にて大に笑壺に入り何さま貴君のお話しに違ひ有るまい全体官員とて人民とて別に人種に異なる所ハ無いがドウした譯だか昨日まで人民で有つた者が今朝何官に拜命するや否や忽ちに其料見まで帽子の角やフロックコートの襟先と同し樣よ角ばつて、ナニ其方どもが人民の分限で政治の事を知るものかと云ふ顔をするは不思儀千萬サそれに野にあるものは何程に才能があつても白人で官員になると何を知らなくても直に黒人ふなるから妙サ勿論學校うだちのテーブル上り此方でもまさかに其連中をつかまへて黒人だらうとも思はねど餘り白ッぽ過るにハ恐入る責めては淺草紙ぐらゐの風色には成つて貰ひ度いものさ子貴君が其仲間には入て一ッ流の泥水を飲むことが苦いので辛抱が出來ないと云ふもマア尤な處もあると云ひつゝ

机の上を捜し何ヤラ書たる反古を一寸と見て引裂き紙捻を拵へてシユウ〳〵と音のする煙管を通し液だらけの紙捻を庭の上に投り捨て煙管をポント吹き直に一服ついで吸ひ付けアヽ好心持に通つたと云ふ樣子ゐて煙を吹きながら時に清水君○○省の方は已に辭職をした上は仕方がない僕が今さら諫たとて何の効もなけれど善惡とも愚存を申すまいが貴君は是からドウする氣だエ何でも貴君の志す所を行ふも宜しいが若し愚存は如何とお質ねあらば僕は今一度官員になつて他の省務を稼いだら宜らうと思ふがと信切に忠告したり。清水も夢野の厚意を心の中には謝したれど官員には餘ぽど懲たと見えてイヤ有り難うは御座いますが迚もいけませぬが……と云ふを夢野は半分聞いて……いけませぬが相談次第ではと云ふのが、ソンなら一番こんどは方角を替へて外交官になつてはドウだ、外交官なら內閣の代る度に相伴を受る氣遣もなし交際も面倒とは云へ相手が文明國ゆゑ掛引も隨分面白からうし其上我國の大事は今日專ら外交に在りとは世論の認むる所なれば隨つて功名を立つるの地も亦た茲にあるだらう、抑〻露國の亞細亞鐵道は撒馬兒罕より西卑利に連なり貝湖に沿て烏蘇里に達し一方は分れて朝鮮に入り永興、北青、釜山に聯絡を通じ一方は遙に堪塞加に渡つれば彼得堡より我が東京に達するは三晝夜半の行程とは相成たり又支那を見れば貴君が往年日本を去たる時には僅に天津より通州までの鐵道敷設を許すとか許さぬとか議論がやかましかつたが今日にては北ハ科布多を經て露國の西卑利線路に連なり、東は山東、南は兩廣雲南より安南に通じ西は四川より西藏に達し印度、緬甸、伊犁、都機斯旦みな是れ鐵道を以て東西の往來を通じたれば亞細亞大陸の政略貿易の焦點は今日すべて支那に集まつたり、扨て東方を顧みれば巴拿馬の運河は十年前に成功し北極の航海も盛夏三ヶ月の間は差支なく出來る樣に成り太平線加拿他の兩線は蜘の絲の如くに

懸つて航海の濫船も米國の東岸より我國の東南諸港に向つて往來織るか如くになり南米諸邦の繁昌は近時頻ふ勃興して北圏の諸國に向ひ濠斯剌利の隆盛なる北太平洋諸島には最早一の無人島もなしと云ふ迄に開けたれば茫々たる太平洋より日本海支那海に至る海路の要衝は都て我か日本帝國に在り、斯樣に並べ立てると敢談演説師が是れ實ニ日本國危急存亡ノ秋ナリ諸君ヨ安閑トシテ虚ク傍視スベキハ日ニ非ズ我輩ハ後藤伯ノ詞ヲ借用シ全國人民ハ正ニ宜ク大同團結ヲ爲サザル可カラスト云フ者ナリとでも吹立てさうに思し召さうがナニ眞逆に日本が今明に潰れて仕舞ふ氣遣は有るまい併し今日の姿で安心とハ申されぬ、尤も井上伯大隈伯の後を受て赤沙汰侯濱矢良伯生質子の敢治家が引續いて外務大臣になられ千八百九十三年の條約改正同く九十八年の再議で日本の國權も恢復の途に赴いたれどマダ〳〵改正を要することが澤山にある樣だ、ナント清水君奮發して此の地位

に立ち外交官となつたらよからうぜと夢野は珍らしく眞顔ふ説出したり。清水は最前より默つて聽て居たりしが其詞の畢るを俟つて呵〻と笑ひお説御尤もで御座る何樣貴諭に從ひ料見を入れ換て外交官になりませうからドウぞ先生の御周旋で此の清水潔を外務大臣にお任じ下さい及びすなから屹度遣り遂げて御覽に入れませうと意外の答に先を越されて夢野は清水の顔をなかめ、ドウして僕の力で貴君を内閣に入れることが出來るものか大抵に呆氣を吐き玉へ。イヤ〳〵呆氣は吐きませぬが外務大臣になつて自ら其重任に當つたら格別のことと左も無くては良しや外交官の末に列なつた所が高〻交際官試補か公使館の書記官外交の例式を覗えるに齷齪して日を暮す位のもの代理公使になるにも世は遙と思はねば成りませぬ其地位さへヤット求めて辛く得べきものを捕へ是よ責るに外交の大敢略を以てするとハ去りとハ迂遠至極呆氣た話しでは御座らぬか、先生マア今日の外交を

御覽じろ大切の事は皆總理大臣や外務大臣たちが相對の直談でコツ〳〵の中に談判が極り肝腎の大使や公使は先づ表向の役人と成り二十年前ほどは貴からず夫も歐洲諸國の外交官なら幅も利かうが日本の外交官でハいくら氣張つても氣張り損の草臥儲が多からうかと思はれます、幕府の時分には最初が米國のハルリス其次が英國のアールコック其次が佛國のロシュー其の次が英國のパークスと順〳〵に幅利があつて維新の後までも其の餘風が殘つたと申すこと二十年來さる風ハ御座らねど獨逸の宰相が死だと云ふ電報が來ると忽に獨逸の書物の價が三割がた下落したり佛國が戰爭に勝つたと聞くと直に佛語の學校に入學するものが一日ゑ五百八十人增ると云ふ位な人氣ゆゑソット外交機密の內幕を窺つて見玉へ、ソレ某公使の語氣が怪しいず用心しろ、ソレ某國大臣の鼻息が荒くなるぞ氣を付いと、夫ハ〳〵氣のもめる仕合せ、加ふるに小弱國ゑ向つて强大國の干涉の烈しさハ近年に至つて益々甚だしく陰謀術數の神變出沒は筆にも詞にも盡されず凡そ人間世界にあるとあらゆる氣障忌み腹の立つことを好ぬこと惡德のある限りは皆これ外交の秘訣なり古人が誠實の心を以て陰險の惡を行ふが外交なりと冷評したる如く諸强國の外交家が此の境界に立交つて魔緣の所行をなす中で僕が外交官の下を働いて其間に奔走したからとて何の効能が御座りませう柔和にすればアノ人馬鹿アリマス澤山ヨロシイと喇られ少し活潑に振舞へばアノ小サイ役人失禮申しマス私ゝ政府ヨク思ヒマセンと外からは突込まれ夫れ見た事か彼奴か差出るから外交の圓滑を妨けるゞと內からは責立られ嚴しく來れば免職かろくて非職と相成るのが落で御座らう是くらゐ吹ゞ飛ぶ樣な安官員になつたとて外交がどう成うゞ露國の鐵道が海を渡つて長崎に掛らふとも濠洲の濠船が一日の內に橫濱に往來を仕やうとも實力くらべの世の中で三寸の舌や一寸の筆が役に立つものと思召す

は先生の見立違ひ近ごろ笑止の儀で御座ると饒舌り廻されて夢野は夢の醒たる如く兩手を伸して大欠をなし、言はれて見ればソレもソウだメービー〳〵

○第十三回

……、左樣サ其の財務官が猶更六ケしう御座る、夢野先生、君ハ官員にさへなれば何もかも已れが見込の通りに行へるもの丶樣に思召さうが夫は失敬ながら酷ひお目利ちがひ假ひ大臣に成つたればとて内閣の評議やら樞密院の意見やら國會の決議やら所々方々の關門かあつて思ふ通りふハ行なへません況して其の下に服從する書記官、參事官、局長、次長ぐらゐで何が行なハれませうか尤も其の中で一小部局の事は夫々の受持があつて自説の行ハる丶塲合も御座れど是は所謂瑣末の事柄で迚も先生のお望なさる丶樣な大局部の事には行なへません、殊に財務の事などハ僕は初より望もなければ目的もなく七を抛て居る次第で御座れバ其役に成つたからと申して何の詮が御座らうや京童ハ善惡ない口を叩きて當時の財務家は痰咳患者見た樣にゼイ〳〵とばかり云つて居ると冷評ますがナルほど税の相談に明ても暮ても氣を揉んで居るに違ひ無い併し是も國庫に收入が無くてハ歳計が立ゆかぬゆゑ據ろなく税則の改正やら新税の考案をも立てる譯でドウも致し方は御座らぬ然るに百姓、町人、職人其外の納税者を見れば何にも税の負擔が重いにハ相違ない取分け農家に至つてハいくら汗水を流して田を作り畑を作つたからと申して割に合ふ話どころ

か算盤を取つては出來ぬ稼ぎソコで水涕を垂して肥桶を擔ぎ醬油で煮しめたる樣な手拭をスツトコ被りにして源右衛門新田の作藏が田圃道を歩行き小聲で唄ふ鼻唄を聞たれば卅年前に江戸で流行つた歌澤ぶし「我ものと思へどつらし畑の業、こいの重荷を肩に掛け、芋粥くつて明暮に、稼いだものは税になる、納めにつらき土百姓、ホンにやる瀬が無いわいな」……、(アヽ清水君惡いノ〳〵、イヤナこぢ附だ大かた合の手にはウアーィと云つたらうナ)是コヂ附なりと雖ども實は百姓の眞面目を寫し得て我ながら妙だと思ひます、但し今日の財務長官は全く是と反對で「ナニ困る〳〵」と言つたとて土地から取立てる地租は一年僅か四千六百萬圓に過ぎず是に地方税の地價割、町村費、備荒儲蓄その外の掛りものを加へたとて八千萬圓と思へば餘つて釣が出る位だナンの夫しきに百姓が困るものか予論より証據には納税期になるとチヤン〳〵と滞りなく納まるじやないか又その外の諸税とても西洋に比べて見玉へ其輕い事は比較に成らぬ程ちや漸やく此節になつて內國税が壹億萬圓になつた位ちや無いか三千八百萬の人口が有る國で壹億萬圓の税は出せませぬと泣言を言ふ樣では國民も亦無神經無氣力きはまる次第で外國に對して頗る愧づべきの至りと云はねば成らぬヤレ參政の權利だの自治の權利だのと口を尖らし肩を張つて力身ちらす連中には不似合の苦情夫に貴樣たちが百姓の泣言を聞たり新聞記者どもが大形に書立てるのを見ると直に實事と思ひソレでハ堪るまい減税して人民を休養せざる可からずと得意に言は輕薄躁急徒らに世間を煽動して人心を惑亂せしめ國家の安寧を紊亂し地方の靜謐を妨害する所爲にして政府に對し奉りて重々相濟まぬ義では無いか……乃公ちやとて何の向ふ見ずにコンナ事を言ふものか地方の官員が上京する度ごとに面會して其の事情を聞いたり又巡回の時には親しく其筋のものを旅館に呼よせて實際を承わつて然らば是ぐらゐは

負擔に堪るだらうと十分に洞察した上で平時考案を立て居るぢや、尤も租税が減じ得らるゝ譯ならば少しにても減じて遣はし度いと云ふ望は明治十年以來の廟謨にて物換り星移り内閣その組織を更め當路其人を殊にし以て明治三十七年の今日に及びたりと雖ども減税を思ふの主義に至つては終始貫徹して曾て渝る所なきは天下の擧て知る所では無いか尤も貴樣は西洋歸りのホヤ〳〵ぢやから知るまいが世間ふも兎角この大主義を知らぬ奴が多いとは不審千萬サ能く考へて見玉へ此の堂々たる大日本帝國に於て文武の政を行ふには一年壹億萬圓ぐらゐの通常經費の懸るは當然ぢや歐洲諸國の下手經濟家であらうものなら迚も此の仕賄ひは出來や仕まい然るを立派に仕賄ひ國債と雖ども内外債を合せて僅に拾億五千萬圓に過ぎず紙幣と雖ども交換準備外の分は僅に貳億七千萬圓に過ぎずと云ふは天晴なる財務堅固なる經濟で有らうガノー爰らは苟くも貴樣も經濟學を修めた仁なら感服いたさるべき筈、勿論我國の財務は議院に於ても大きゐ現内閣の方略を信用し當路その人を得たるハ大隈松方兩伯の後は乃公ほどの人物は決して有まい此人が今五年も在職して居らるゝならば益々理財上の成蹟を見ること必定なりと大多數にて稱賛し既に東京の銀行同盟よりはアレ見られよアノ通りに黄金の頌德標を贈り大坂の商人集會所よりは純銀の花瓶に功業の次第を彫刻して贈つたし又た去年北陸を巡回した折であつたが當縣下の農民が段々と富裕になつて來たハ全く閣下のお蔭さま責てハ旅寓のお慰にとて時ならぬ時節にわざ〳〵百五十八村が聯合して盆踊を催ほしヤー豐年ぢや滿作ぢや閣下のお蔭ぢや有難いサイコドン〳〵と囃したて夫ナ大の男がどてらを著て下駄をはいて頭の上に直徑四尺ばかりの浴桶を乘せ其中には菓子を一ぱい入れ圍にハ細長い提灯を十二三ばかりグルリッと立て並べ太鼓を敲いて唄ひながら踊たは見物であつた、是等が皆これ

百姓町人が其負擔を重しとせざる所ナント爭ふ可からざる實證であらうがノウ併し今にも國庫が富で來ると其時こそ減租も減稅もして遣はさうヨ十四年前米國では國庫ふ四億五千餘萬圓の金が溜つて遣ひ道はなし責て海關稅でも減じて歲入を不足になし其金を以て補へうと云ふとイヤ〳〵海關稅を減ずると人民が惰弱になつて惡いなどと議論に其日を送り決行せざるを數年に渉つた例もあれば日本とて決して望み難きにあらず其時には乃公が例の非常英斷を以て地租ヲ地價百分ノ一ニ減ズル議案を持出し下院に於て反對論が出來ぬ樣に其理由を說明し斯の如きが故に政府は現行の地租を百分一に減せざるを得ずと論辨し滿場拍手喝采の中で大多數を以て可決させて見せるず夫だから貴樣のやうに無暗と下民の疾苦だの農民の慘狀だのと證據も十分で無い事を喋々と議論するは害あつて益なしぢや何もクヨ〳〵案じるには及ぶぬ乃公に任せて置けヨ萬事は乃公の方寸に在り」と樋竹の破から大雨がこぼれる樣ふ息もつかずに御說法承はつて呆果てゝこンな天狗に惡く逆らつたら引裂れるかも知れぬ長居ハおそれ口氣の臭いのを嗅ばかりでも胸がわるくなると存じて早々に飛出しましたがナント先生これが今日明治三十七年の財務主任で御座る其昔し松方伯や大隈伯が財務を執られた時とは雲泥の違ひで御座りますぜなんで僕に其の下風に立つとが出來ませうア、否なを〳〵眞平御免を蝙蝠傘ほねでも折つてハ馬鹿〳〵しい先生お分りに相成りましたかと辨じたれば夢野は爪の先で頤の髯を拔ながらムー分つたよ〳〵

○第十四回

夢野は時の移るを知らず聽き居たりしが今その話の盡たるを見て、アヽ、面白かつた實に近日に無い珍説を承たまはつた寔は處世の秘訣に付き僕は一個の新説を吐いて世論に問はうと思つたが君の話で見れば僕も亦いさゝか持説を變ねゞ成らぬ樣になつて來たぞ、夫は餘計の言として差詰め君の處世の相談を片付ケ樣が今も君が言はるゝ如く外交官もいやダ財務官もいやダと決心の上は、内務官ソレも是ゝゆゑにいやだ、司法官ソレも云ゝゆゑに同じく否た、秘書官マッピラ御免、警察官トンダ事と一ゝかぶりを振るに違ひ有るまい夫も僕が大臣か長官で君が宜しいと返詞をすれば直に其役に任じやうと云ふ譯ならば強て勸めも仕やうけれど勸めた所が御意に適つたら貴君が勝手に御周旋あさいと云ふに過ぎねば固より お勸めは申さぬ既に「私どもゝ貴下には不服でござるに依て御辭職なさつたら宜まからう」と勸めると

何だ乃公は勿体なくも陛下の御代官たゞ辭職の勸告などゝは失敬千萬の無神經の奴原かなと立腹したと云ふ昔話もあれば況て奉職の勸告は此の烏有仙史なか〳〵強ては致し申さぬ貴君の心まかせ御勝手次第、併し人間は不自由なる身を以て不自由なる世に生れ不自由なる社會に交ゝらねばならぬ動物なりと考ゆれば何になつても自分の思ふ樣にゝ參らぬもの獨り官員ばかりが左樣では無い世間おし並て皆りの通り妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と當然の事に感じて變な料見を出し浮世を棄てゝ山林に入るなどゝ迷ひ込むも畢竟は氣隨我儘から起つて儘ならぬこゝ浮世なれと云ふ社交の原則を覺らぬからの惑ひ今日でも學識に富み才智ふ長けたる人〻が動もすれば社會の現狀に不平を懷き可笑く世にすねて筋違に其身を置き詩文小説を假て世を嘲り時を罵り以て愉快なりとするも矢はり同じ惑ひ、貴君もドウやら此の魔道に惑ひ込さうに思はるゝから好く〳〵氣を附け玉へ富貴

よりは貧賤が面白い世に用ひられて氣を揉まうより草葬よ隱れて食はず貧樂の方が宜いと云ふのは詰り不平の負惜み古い諺に憎いく、は可愛の裏よいやぢやく、は又その裏よ泣ておどすはッレ裏の裏とあるが矢たらに慷慨激烈の論を吐て世を驚かし此奴險難と思はするも其中には泣いておどす連中があるから油斷は出來ぬ貴君がモシ如是連中の仲間入でも仕たら夫こそ本統に身を棄ると云ふもの、マア僕が善い手本ぢや君も御存じの通り僕は歐洲に數年留學して成業の後に日本に歸り官員になつたが當時の政略に感服が出來なかつたから朋友の諫をも容れず斷然官を辭して民間に下り夫から商人になつたり職人になつたりして色々の境界に身を置たが何も彼も氣に食はぬからグッと世に殺げて政治論者になり我苟くも國の爲とあるからには世間の毀譽へなんの糸瓜の皮帽子言ふなら勝手に夕月夜かまを拔ると乃公ぢや無いぐと腹を据ゑて掛つて見ると賴に思つた本陣は何

欠

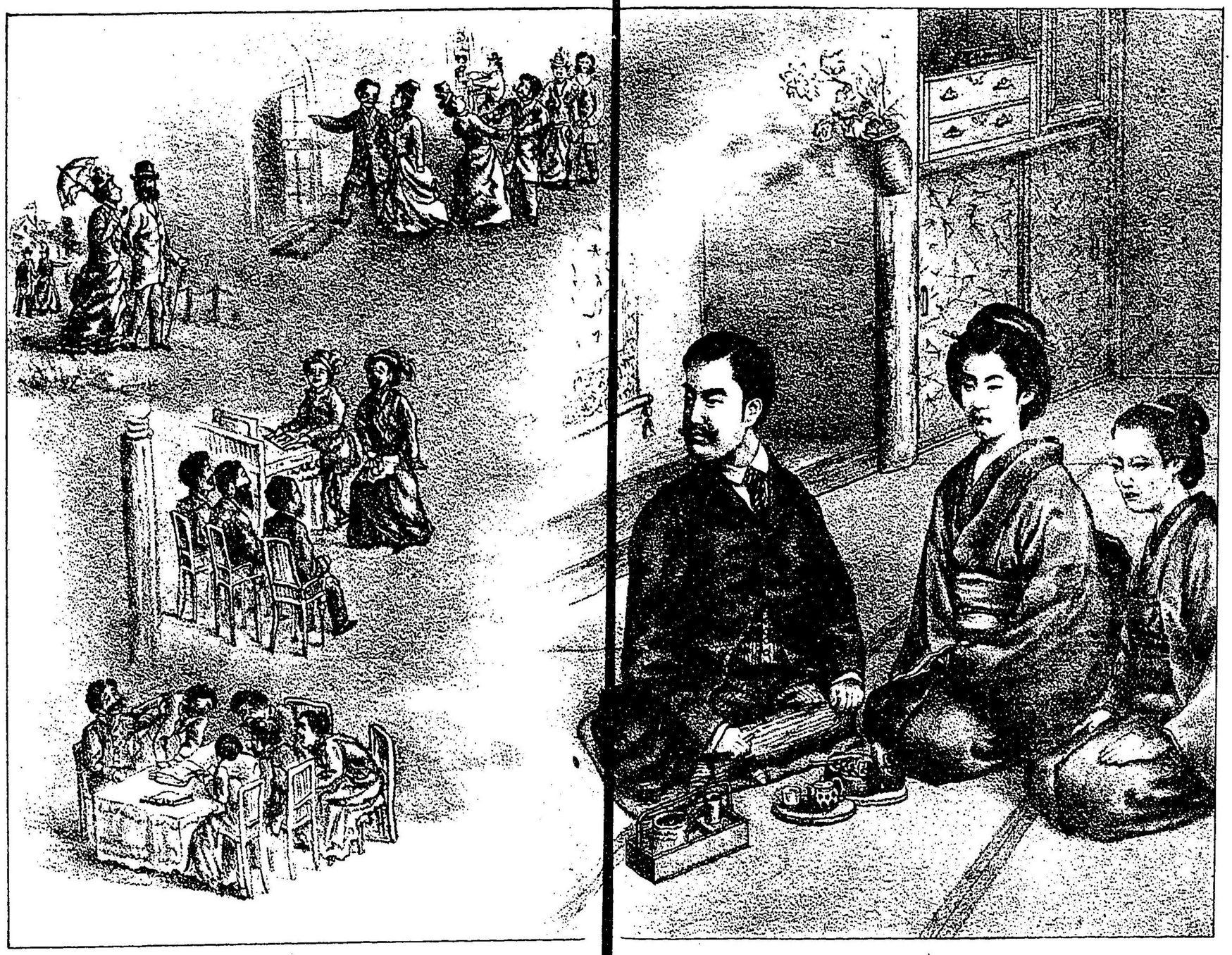
MISSING

御上達と申すことで此間も鹿鳴館で誰やらが頻に賞て居ましたが大層早く上りました子夫ふ貴嬢は一たい聲が好、だけに唄は格別に結構サ唄ハ一聲二節と云ふが原則だから聲が悪くてハ何程節が能く出來でもサアと云ふ場で晴れぬから仕方が無い不……時に今日ハめづらしくお晝前にお内ゝ居てだが學校はれ休みかネと問ハれて乙女ハ、ヘー昨日から一週間ほどは音樂會の相談があると申す事て教師たちが其方へ參られますから臨時に休みで御座います……ナニ妾などの藝ハ根が中年仕込ゆゑ悪い所に清元や長唄の節が出てドウも本統の唱歌の聲にハ成りませぬよ初ッから稽古をなすつたお方の足もとにも及びませぬ位ね中ゝお恥しい業で御座いますと物に誇らぬ乙女が持前の美德話は四方山の問題に轉じて遂ふやまと新聞の續きもの や金港堂出版の新作小説に及びたるに乙女は潔に向ひ、アノ「煨芋の煙」と云ふ小説は貴郎のお作ださうで御座りますと子と問はれて清水は

少し驚きしが左あらぬ体にて、イーエ少しも覺へハ御座らぬ左樣ナ本ハマダ見た事もありません。デモ此間永田町の夜會の席で皆さんが其噂をなすつてソレニあの芋燒の翁が秋萩の嫗を宜い樣にくるめやうとすると嫗もさるもので故とくるめられた振をして翁の不意を出し拔かうとする所から鰹つりの舟人がこち痛く言ひ爭へる樣などの面白さハ清水の才筆に違ひない實に近代の名作だと識別さんがおつしやると嗅出先生が其側から、ソウとも〳〵清水の著述に相違ない尤も出版元の書林では固く其作者を云はないが僕の朋友が校正の時にチラリと原稿を見た所が全く清水の筆跡であつたと申すこと〻例の穴探しを云ハれましたので皆さんが夫れでハ愈〻そうだと目利が究りまする吐蹠に阿部勢男爵の夫人と赤螺長者の令孃が(此女性たちハ夜會の場所でハ常時幅を利かせ物識天狗の器量自慢交際上手と擧さるを手柄と思ひ男性の群の中に立交り出しやばつて話をするが得意のレージースなり)其所へお出なすつて、ソウ〳〵燠芋の煙ハ清水の作サそりや疾から皆なが勘附て居ますヨ……此間も赤沙汰夫人が私かたへ參られて清水の新作を御覽でしたか大さう面白う御座いますが併し濱矢良夫人は流石に御自分の旦那の事を當ッこすられて塞いでお出だと物談られました位サ……そりや男の事ハ何とでも書が宜しう御座いますが其の飛ッちりがレージーに掛つては困ります子……其の清水さんハ今晩ハ來て居られませんか……百舌山さんのお妹子と出合せて見たい子……さうサ清水さんハ温和くて口を利かぬ人だから面白くあるまいョと夫は〳〵種〻の取沙汰で其晩は貴郎の噂ばかりで……。それハ頗る迷惑千萬ナンノ余がそんな小説を書きませうが。ナニ妾にお隱しなさらいでも宜しう御座いませう、他人らしい、決して人にハ話しハ致しませんから……そりやそうとして時に貴卿ハ此間御職をお仕なすつたとお話しが御座りましたが夫からどう遊ばし

たらうと實は母さんと二人で内〻お案じ申て居ましたヨと固より信切なる乙女ことにハ末ハ二世の夫と頼める人の身の上を案じ煩ひ心に堪かねて問掛くればお賢も傍より清水に向ひ、ホンニ潔さんが官員にお成だから目たゝく中にズン〳〵と御立身をお仕なさるに違ひないと乙女と二人で喜ひ切つて居たのにナセお止めなすつたネ。イヤ夫には少〻仔細のある事で長官も頻に辭職を思ひ止る樣にとお諭が御座りましたがドウモ心に濟まぬ事もあり又前途の見据も附ませぬから思ひ切つて止たのでナニモ別に譯があるでは御座りません決して御心配下さいますナ。そこハ發明な潔さんのこと案じハ致しませんが是からドウなさるお積りだ子。いづれ何とか身の振方を考へて付る積りで御座ります……僕の事ハドウでも宜として時に乙女さん貴孃ハ此節どふしてお出なさるヱ何か少しは目的が附ましたか子と問はれて乙女は俯向しが稍あつて顔を上げ、サア私の身の上で御座いますが今ハ貴卿のお蔭で樂な暮になりましてお指圖どふり學校に通ひマア及ずながら稽古をいたし一ト通りの交際も出來る樣にと精出して居りますが貴卿お腹をお立なすつてハ困りますが實は高等婦人の修行ハ餘り感心いたしませんヨそりや有り餘つて榮耀榮華なお方ハアレで好か知りませんが中〻親子夫婦が倶稼で往うと云ふものにハ餘ッほど調子が釣合ませぬ樣に思ハれます當然ならば女ハ女のする業があつて申さば臺所の始末縫針洗濯家の賄ひかたを一番に覺えねば成らぬと常〻母にも教つて居ましたが學校でハドウして〳〵ソンナ事でも言ハうものなら夫ハ下等社會の婦人わざレージーたるものが賤の女の學びをするにハ及びませぬ第一が舞踏第二が唱歌第三が奏樂第四が談話(流行言詞を專らに覺ゆべし)第五が讀書(流行の小説ハ必らず讀まざる可からず)を出精お仕なさい是がよく出來ねば人中に出て品格を高くし男どもの尊敬を受る譯にハ參りませんゾと申す教で

御座いますから私どもが目でハ丸で世界が變つて居る樣で御座います、併し有り難い事には此節ハ一旦棄つた日本の踊やら淨瑠璃ハアレが眞の美術ださうで頻に稽古の仕手が多くなりましたので私ハ小供の折に稽古しましたのが役に立つて只今でハ清元と長唄ハ其お稽古を手傳ひ踊の方も助教とやら申すものに成つて居ます夫ゆゑ皆さんのヤレ師匠だの教師だのと仰しやつて夜會や舞踏會にハ是非とも出る樣にとお勸なさいますが併し身分が是で御座りますから私ハ矢はり日本の紋付白襟でナニ穢なくさへ無ければ好いと存じいつも〳〵同じ表粧で據なく出掛ますが實ハ高等婦人のお相手ハ隨分困りますヨ堪らぬと思ふ事が澤山ですが是が修行かと思つて辛抱するものゝ女心でハ時たま辛抱の仕惡い時も御座りますと云ふを聞いて清水ハ、サ　乙女さんッコが辛抱ぢやッコを辛抱しなければ成りませぬ



○第十六回

清水君めづらしく御在舘だナ。コレハ〳〵夢野先生ナント思召して斯る塵界に御下臨なすつた僕も久〻御無音いたしたゆゑ近日御閑居の木戸ィヤ門を叩いて御高説を親へうと存じて居ながら忙しいので今以て御不沙汰……。御不沙汰へ御互さ今日へ朝から十二社に出掛て凉い所で晝寢でも仕やうと思ひ八時から宅を出た所が途中で鼻髭長者に出遇ひ、ドウダ先生十二社へ止て僕と一所に來るべしと無理に馬車に載られ中洲へ連て往れたがィヤハヤ田舍ものゝ豪奢へ小説の材料にも餘り多過るくらゐ是は堪へられぬ長座をしたら虎列刺にでも取付かるゝで有らうと思つたら急に怖くなり早く逃出して君の所をお

尋ね申した次第サ……。そりや丁度よかつた僕も只今歸つて上表を取た所で御座つた。さうか時に清水君、君は此程から投機銀行の役員になつて日〻御精勤と承はつたが先づ〳〵結構併し夫も今月一ぱい立たらィヤ迚も僕にハ辛抱が出來ぬと云ひさうだナ。ィヤ〳〵今の分でハ却て辛抱が出來さうで御座る。夫は賀すべしダガ清水君東京にハ日本銀行を初として國立私立の諸銀行に魏然たるもの數多ひ中で君の才學を以て銀行に入らんと望まば有名なる大銀行が爭つて聘するハ疑ひ無いに何故あつて資本とても僅に廿萬圓を過きざる投機銀行にハ身を投じ玉ふたか尤も此銀行と君との間に特別の關係でも有る事なら格別だが僕が聞及んだ所でハ左樣でも無い樣子實ハ君の朋友知人ハ君の料見が解せないと云つて居るよ、斯く申せばとて決して僕等が投機銀行を誹謗する譯ては無いが有体の所が彼の銀行は世上で餘り評判が宜く無い樣だから或は君を累ハす事が出來はせぬかと案じるのサ、全体その名稱が投機と云ふだけあつて公債株券地所家屋其外の思惑にハ中〻烈しき銀行で其代り貸出金を來たら抵當の外ハせぬと云ふ店だと皆が噂をしてゐ、彼投機銀行か彼所ハ相場屋と質屋を兼業して居る銀行サと嘲り笑ふ連中もあるとの事、貴君の亡叔が某私立銀行て相場に失敗した事ハ君が常に般鑑とする所でハ無いか夫に自から之に當るとハ尤めて是に倣ふと云ふものかと思ハるゝ同じ銀行に入て立身の計ごとを定むるならば評判の好い信用のある銀行に入つてハどうだ他言ハ御無用さし向での御忠告併し君の事だから定めて卓然たる高案もあつての義ならば心得の爲に拜聽いたし度い子と例の夢野が信切の意見に清水は深く感じ入り、今に始まらぬ事ながら先生の御信切ハ誠に有り難う存じますナル程世間で餘り評判の好く無い投機銀行に飛込だと御聞なすつたら其御懸念ハ至極御尤の次第で御座る去りながら僕が申す事ひと通り御聞下さい、實に貴説の

如く府下の諸銀行にて盛大を極むるもの其の幾許なるを知らず僕ふして干るに志あらば隨分その中で勢力ある銀行に住込むとも敢て難くゝ御座るまいが試に其世上に信用あり社會に勢力あつて評判のよい銀行と投機銀行とを比較して御覽じろ其間に果して何等の差異が御座るか勿論資本金が巨額であつたり家屋が立派であつたり頭取の髯が多かつたり支配人の背が高かつたり報告の演説が上手であつたり交際が派手であつたりするのゝ目に立つ程ちがひませうが肝心の營業むきに至つてゝ何れも御同樣で別に差異があらうとゝ思ゝれませんせ、先づ御冷評の質屋から辨明しませうが今や東京の廣き銀行の多き其數ゝ百を以て數ふるに餘れど何れか皆質屋に非さるべき貸金を仕て戴きたい、ヘィ承知しました抵當ゝ何て御座る抵當次第金高次第て利息を高下いたします公債ならば年何朱鐵道が何ほど郵船がいくらで御座ると答へるが銀行貸付掛の紋切形その有樣ゝ質屋の店で衣もの質がいくら道具質がいくらと申すに些も違ひゝ御座るまい、但し質屋ゝ中々眼が利て置主を見るから時によつてゝ眞打の大夫にゝ見臺一ッで百圓貸したり顔利の頭にゝ半纏一枚で五十圓用立つたりするゝ今日でも罕しからぬを是れ實に其の置主に向つて信用を置く故でゝ御座らぬか區々たる質屋にて猶且つ然り然るに堂々たる銀行に於てゝ貸借の間ゝ幾許の信用を置くものと思召すか誠にいま一豪商若くは一縉紳あり其人の身代ゝ五十萬や百萬ゝ紙屑買に踏ませても大丈夫だと假定し其人が突然第一等の大銀行に來て「時に頭取さん急に入用の筋がある余の一判で一萬圓貸して下さい」と依頼したと假定し玉へ其の銀行の頭取ゝ眞面になつてチョット眉の間に八の字を寄せ眼鏡の上から先方の顔を覗き「へーモウ御易ひ御用で御座りますが生憎只今は融通が烈しいので有金が御座りません併し慥な抵當でも御座りますれば何とか同業の中を問合せて御用立ませう」と体よく斷

いるが十の十皆是なり論より證據ハ先生の才學が質屋に向ひてハ幾分の信用があらうも知れぬが銀行に向つてハ夢野の學識も烏有の才智も半文錢の價なしナンナラ一寸と實驗して御覽なさい何の銀行でも受付の手代に刎付けられ、左樣な用なら他を御尋ねなさい一昨日お出でとゲジ同樣に取扱ハるゝのハ清水潔が公證して御受合ひ申ますゼ、其だから偶々商人の間で行ハるゝ約束手形の高を御覽じろ東京の商業に對してハ瑣細の高でハ御座らぬか約束主が慥で受取人が慥で裏判主が慥でお負に三人の手を經て添證書があつてヤットの事で銀行が割引をする位なれゞ中々早急の間にハ先づ合ハぬ方が大丈夫サ、現に去年の秋であつたが大藏省から東京の商賣上にて信用を以て取引する高ハ平均一ヶ年に幾許なりやと諮問があつた時に商法會議所では其高ハ當會議所に於てハ調査をなすこと能ハずと雖ども東京各銀行にて割引したる手形の金高に外ならずと答議したれゞ大藏大臣閣下が成ほどさうだらうとあつて割引高を調査あると僅に〇〇萬圓、商賣の高を較べると何百分の一だと申すことサア是でも銀行ハ質屋で無いと仰しやるか銀行の貸借上に信用を以てする實證があるなら先生承りませう日本の商業工業の大計畫が多い中で抑も何の事業に何の銀行が信用を以て助けましたか第一期拂込濟の株券を五掛で貸したら非常の英斷で御座らうヘン束も子ヱ話しサ、なんの夫しきの質屋銀行品を預つて金を貸すのに智恵も才覺も入りませうか利足の勘定か出來さへすればどんな椋鳥でも貸借だけハお頭になつて樂に勤まる位で御座るソレを先生御存なくて某銀行は質屋に同じなどゝ仰しやると質屋の方で「馬鹿ア云ふなあんな椋鳥と一ッにされて堪るものか」と腹を立て惡くすると足らずまへの入替に差支ますせよくお氣をお附け遊ばせ、是ぢやによつて投機銀行が貸借上でハ質屋同前と世間に云はるゝのハ取も直さず日本帝國にある諸銀行の通則を嚴重に

遵奉して營業をして居ると云へるゝ賞詞サゾ白髮毬の頭取や藥鑵頭の支配人が嬉しがる事で御座りませうが氣の利た質屋さん方へ對して〻實以てお氣の毒さま、サア是でも先生投機銀行が悪う御座るか流石の先生もナント一言御座るまいと捲し掛てゞ説たりける

○第十七回

清水は吸掛たるハバナ烟草の火が今の長談に消たるを見て安全マッチを箱の裏にてチット擦て燃さしに火を附け暫しパク〳〵と遣らかして息を入れたり夢野は今しも清水が滔々と辯じたる銀行論ふ〻隨分感服いたしかぬる廉もある先ごろ○○君に承〻つた銀行の講釋と〻甚だ齟齬したる所もあれば一番難問して清水を説破して見やうかイヤ〳〵慇に議論をして負るも面白からず若し勝たらゞ清水が話しの腰を折るべしと思ひ直して故と説を吐かす側へなる器械ラム子を水呑に注て飲なから、ハー成程ナ今のお説で質屋銀行の事〻分つたが投機〻どうだ是も銀行一般の營業か子まさか左樣でも有るまいと議論の緒を引出せは清水は烟草を唾壺の角に載せ、サア其投機の話し〻先生のお尋がなくとも僕より辯明しやうと思つて居た所で御座る、いかにも公債株券の相場〻銀行に取つての大禁物これまで相場に引掛つて身代限と相成つた銀行か澤山あるが善い般鑑なれば今日にて〻何ナ銀行と云つて表向きに諸、相場、仕、候、と看板を懸けて居る銀行〻一軒も無いが其内幕を覗ひて見たら大抵〻大なり小なり相場に手出し

をして居ますぜ尤も他の仕事は能く知れませんが日本銀行を初めとして百萬圓乃至五十萬圓以上の資本で立派に堅い營業をして居る銀行はそりや決して相場などを振り向ひても見ますまいが夫でも公債や諸株を抵當に取るからにハ毎日の相場の上ゲ下ゲ位ハ氣を留て見て居らねば成りませぬ其以下の銀行でハ右の諸株を抵當で貸す時分に思ひ切て掛を強く貸せば利息も多く取れると云ふ都合があつたり有金が多い時には安い株を買附て置き利が乘つた時に利喰をすれば大層に割がよいと云ふ都合があつたり夫が高ゝると仲買の賣附や買附を抵當に取つて頭金を貸して遣れば非常に割がよいと云ふ都合があつたりするからソレ自から投機に緣を引き最初ハ抵當の行掛りが仕舞には自分の損益と成りコウ損が嵩んでハ株主に申譯がないィッソ思ひ切て張て見やう丸十を呼んで來い角一ハまだ來ぬかと出入の仲買に注文を出すが最期一度その味を締たらモウ忘れる事は出來ぬ甘く利が乘れば乘せ掛けて食つて見たくなり惡く引るゝと今度ハ取返して見たくなつてトウ〳〵深淵へはまり拔差が出來なく成つて某銀行とハ假の名まことハ相場屋て、御座ると我は言ハねど人が言ふ其口にハ戸が立てられぬ先生これが麁だと思召すなら内〻仲買に問合せて御覽なセー客先を聞て恂りお仕なさるだらう先生ハ明治二十一二年ごろの諸銀行がみんな堅氣で役人ハいづれも石部金吉鐵兜兜橋の鐵物を叩いて渡つた時節を御存じゆゑ大方今日の銀行もさうだらうと思召てハ大きな當違ひ少し世間へ出て御覽なさい驚く程に進化しましたぜ是だによつて投機銀行が初めッから晒し打でへィ私かたでハ相場を仕ります夫が險難ならお止なさいとお得意に向つて明白に云ふ方が遙に男らしいでハ御座らかぬナンノ可笑容体を作つて「我等が銀行ハ決して相場ハ致さぬ尤も公債株券等の賣買をするのハ見込でする事だ相場ハ投機なれども見込ハ投機に非らず是商家の懸引な

り」と柄もない所に理屈をつけ、紳士然たる面附をしたからと云つて世間にも荒神さまが附いて居るものの夫を誠と思つて欺さるゝ奴がある ものか見込ハ投機に非ずといくら辨じたからつて事實が同じけれど解釋に殊なる所が有らう筈の無いハ知れ切た話し、是でも先生ハ投機銀行ハ身を置くべきの銀行にあらずとの玉ふか外に身を置くべきの銀行あらぬ憚なく御示を願ひたい、先づ個樣に質屋同然と云ふこと幷に投機をする事申上げて我が投機銀行の爲に汚名を雪いだる上ハサア是からは先生が信仰してお出なさる堂々たるバンクの役員になるにハ自ら言ふべからざるの苦しみある事を一寸と申しませうか子煌々たる花崗石で積立たる三層四層の大厦ハ改正第一等道路の側に聳へ門を入て其堂を窺へば手代伴頭數十人づらりと並んで帳面キィ〳〵(鐵筆で薄記を書く音)算盤パチ〳〵紙幣ピラ〳〵銀貨チン〳〵と音をさせ毎日〳〵五十萬百萬の出入をする大銀行てハ其重役と云へば飛鳥も落る程の勢ひ世間に出ても幅の利くをハ驚くべき有樣だがサア其身になつて見たら中〻の心配夜の目も碌〻くく寐らぬ事ハ一月の中に二三度ハ御座りませう尤も夫か銀行正當の用向て忙がしいなら當り前だが案外さうて無き事が多からうと思はるゝテ、明治二十三年ごろハ銀行の重役たるものハ氣轉が利かなくてハ勤まらぬとて皆が氣轉丸を飲みましたが夫はグッと昔しの昔話し明治二十五年ごろに至つてハ目先が見えなくてハ往かぬとて八百倍の顯微鏡を目鏡にして掛けたが廿九年になつてハ夫ばかりでハ往かぬ口か利けなくてハとて頻に演説のお稽古、イヤ〳〵踊が出來なくてハ往かぬソレ藤間か花柳に入門しやう、イヤサ其踊でハ無い舞踏の事だ、ソウかツンなら内で令孃に下稽古をして貰つて舞踏學校に入門しやうと氣を揉だが明治三十七年の今日と相成つてハ氣轉が利て目先が見えてお話上手の交際巧者うの上ふ鼻が利いて嗅出す事が達者でなくてハ儲からぬと進ん

で來たからサア大變、鼻をよく利かするにハドウしたら好からう、迚も平安散で嘘をした計りでハ利く樣にハなるまい鼻科專門の醫者ハ無いか、造鼻術を試み樣か、ナニ造鼻術でも別に嗅出す功能ハないとナ、いか樣これハ無からうソレ〳〵自慢新聞の廣告に天狗の鼻の黑燒を賣ると出て居たぜ其家ハたしか杉森邊だと思つたよ、ムー其の黑燒ハ高慢になる妙藥か夫でハつまらぬ、ナール程瑞西で五年間遣つた獵犬の鼻の尖を二十ミリメートル程殺で夫を八倍のアルコホルに漬し探偵の鼻毛四十八本を細末にして混ぜ其の丁幾を毎日三度づゝ六ケ月の間鼻の中に皮下注射するとキット鼻が利く樣になるとか、イカ樣これハさうだちう、ナンの少こぐらゐ苦しいのハ我慢をしやう、奥深い處の評議の香を嗅出す事が出來なくてハ妙がないと夫れハ〳〵きつい御苦勞、エー先生是が出來なくてハ今日の重立つたる銀行の重役ハ勤まりませんぜ、爾のみならすやつと三月前に上任した財務官が横風ナ顔で時に貴公は何と思ハつしやるか知らぬが全体今日の銀行ハ營業が虚だ西洋で斯樣〳〵に致すから是に倣ハねハ相成らぬと癖に障る樣ナ事を云てつもへィ〳〵御尤千萬成程左樣で御座りますと米搗ばつた見た樣にヒヨコ〳〵と首を下げねば成らず上ハ勅奏官の高きより下ハ判任お雇寫字生に至るまで官員と見たならば誤り閉口して居ねばドコデ損が有らうも知れず、其代りにハ苟くも政府に關係のある事ならどの蔓に攀つても儲け口を外して平日勸めた甲斐がない諸縣の預り金を外に取られて成るものかと互にあらそふ有樣ハ其爭ひや君子なりとハ申せども隨分紛々と否な臭がする事も御座りますのサ、是を要するに「理窟商人錢を儲けず人間ハ頭を下げると思ふと腹が立つ金に誤ると思つて頭を下げろ金さへ儲けりや夫で宜いと申すのが原則で御座れを先づ蟲氣があつてハ勤まりませんよ然るに投機銀行でハ有り難い事に初から政府向の御用を勤め樣と思ハねば鼻が利く

で來たからサア、大變、鼻をよく利かするにハドウしたら好からう、迚も平安散で嚏をした計りでハ利く樣にハなるまい鼻科專門の醫者ハ無いか、造鼻術を試み樣か、ナニ造鼻術でも別に嗅出す功能ハないとナ、いか樣これハ無からうソレ〳〵自慢新聞の廣告に天狗の鼻の黑燒を賣ると出て居たぜ其家ハたしか杉森邊だと思つたよ、ムー其の黑燒ハ高慢になる妙藥か夫でハつまらぬ、ナール程瑞西で五年間遣つた獵犬の鼻の尖を二十ミリメートル程殺で夫を八倍のアルコホルに漬し探偵の鼻毛四十八本を細末にして混ぜ其の丁幾を毎日三度づゝ六ケ月の間鼻の中に皮下注射するとキット鼻が利く樣になるとか、イカ樣これハさうだちう、ナンの少しぐらゐ苦しいのハ我慢をしやう、奥深い處の評議の香を嗅出す事が出來なくてハ妙がないと夫れハ〳〵きつい御苦勞、エー先生是が出來なくてハ今日の重立つたる銀行の重役ハ勤まりませんぜ、爾のみならずやつと三月前に上任した財務官が横風ナ顏で時に貴公は何と思ハつしやるか知らぬが全体今日の銀行ハ營業が虛だ西洋で斯樣〳〵に致すから是に倣ハねハ相成らぬと癖に障る樣ナ事を云てつもへイ〳〵御尤千萬成程左樣で御座りますと米搗ばつた見た樣にヒヨコ〳〵と首を下げねば成らず上ハ勅奏官の高きより下ハ判任お雇寫字生に至るまで官員と見たならば誤り閉口して居ねばドコデ損が有らうも知れず、其代りにハ苟くも政府に關係のある事ならどの蔓に攀つても儲け口を外してハ平日勤めた甲斐がない諸縣の預り金を外に取られて成るものかと互にあらそふ有樣ハ其爭ひや君子なりとハ申せども隨分紛々と否な臭がする事も御座りますのサ、是を要するに「理窟商人錢を儲けず人間ハ頭を下げると思ふと腹が立つ金に誤ると思つて頭を下げろ金さへ儲けりや夫で宜いと申すのが原則で御座れば先づ蟲氣があつてハ勤まりませんよ然るに投機銀行でハ有り難い事に初から政府向の御用を勤め樣と思ハねば鼻が利く

にも及ばすお役人に用がなければ頭を下げるにも及ぞす純然たる商人がお得意で商賣を仕ます故たんと儲からぬ代りにハ餘計ナ心配も無く氣が揉なくて餘程宜しいかと存じますが先生これでも僕の料見が違ひますがと辨じたれば夢野ハ此上言はゞ面倒とや思ひけん、イヤ〳〵中々結構で御座るとッコ〳〵に暇乞して出でにけり

○第十八回

個樣に口を放つて述べたる程なれバ今度こそ清水も辛抱して投機銀行の業務に從事するならめ去るにても行末のさまハ如何あるべきと夢野實ハ打案じて居たりしに其後聞けば清水ハ七月の初つかたにやありけん決算の事にて酷く重役と云ひ爭ひ左ばかり曖昧の取繕に一時を免れんと叶ふ可らすとて其日に役を斷りて銀行の關係を絶ちしと云へり、夢野ハこれを聞て左こうあるらめッレにしても清水が其以來わが方へ來らぬハ不審さすがの清水も余に對して少ゝ面目なき故にてあるかィヤ〳〵彼漢それしきの事を何とも思ふ仁にあらずョシ〳〵今度ハ此方から押よせて一泡ふかせて呉れんとて夢野ハ飄然と庵を出で清水を音信四方山の話より遂に清水が進退の事に及びたるに清水ハ些も悔める氣色もなく、いかさま僕ハ彼の銀行の頭取と決算の一條に付て大に意見を異にし烈しく議論に及び退身いたしたに相違御座らぬ其決算の次第ハ彼の銀行の機密に關する事なれば退身の今日と雖ども僕ハ決して其機密を先生に洩すことハ出來ませぬマタお聞なされても益なき事て御座る簡短に申せば頭取ハ臨機の手段を

行へうと主張し僕ハ正則を履んで行かうと云ふ丈けの違で僕ハ僕の見込が好いと今日只今までも存ずるが併し其實を申せば孰が眞に投機銀行の爲になるやら結果を見ぬ内ハ判斷が出來ませぬから敢て頭取が失策だとハ申しませぬ、尤も僕が退身よ付てハ頭取もひどく諫めたれどそこが僕の流義で思つた通りに遣られねば氣が濟まぬゆゑ斷然退きハ退いたれど彼銀行ハ此後とても益〻繁昌するであらう彼頭取ほどの人物ハ澤山なからうと信じて相變らず尊敬の心を失ひませぬが去ながら裏門出入御勝手通りで無けりや旨い事の出來ぬ間ハ彼の頭取も十分に驥足を展す事ハ難からう詰る所が地獄の沙汰も金次第人間萬事金の世の中廉恥も意氣地も振り捨て上手に取入るものが優勝で節操だの名譽だのと拘泥するものが劣敗と相成るハ歐米ばかりでハ無い明治卅七年の今日でハ日本とても此點だけハ立派に歐米と同等どころか殊によつたら遙に其右に出る位ヤレ〳〵嫌な世の中で御座ると嘆息したり、夢野ハ頻に首諾て、イカニモ〳〵左樣であらう夫で貴君ハ先づ銀行の實地研究ハ出來たが是から何處を研究する御所存かと問へば清水ハサレバで御座る此刷毛序に相場會所に入りて見やうかと思ひますと云ふに夢野ハ首を傾ぶけ、アノ相場會所に、ナル程ソレモ好からうが貴君ハ今日の相場會所を以てブールスやエキスチエーンヂと同樣の働きを社會に與ふるものと思ひ玉ふか、勿論幾分か同樣の働きを爲ざるにあらねど貴君が歐米で實見した所とハ頗る相違する所も御座らうぜ尤も實地の所ハ僕も相場師でもなく會所の役員でも無いから心得ぬが先づ今日までの成行をお話し申さう、當初の事ハ貴君ハ幼年であつたれば御存じなからうが蓋し明治十九年頃であつた當時兜町に建て居た株式取引所がそらい繁昌で公債、郵船、鐵道、正金、東株等の諸株券の限月が盛んに流行て東京廣しと雖ども恐らく相場に手を出さぬものハ一人も無い程であつた所が盈れば缺るが自然

の數と見なして其所にブールス論と云ふものが現出したのさ、其論の起りと云ふハ第一にハ株式や米商に收むる手數料を澤山に株主が取るのが好く無い年四割五割と云ふ利益配當ハ餘り株主が儲け過る第二にハ仲買ハ相場師ぢや相場師の手で公債や株券の直段を高下するが好く無ひ夫でハ眞面な商人が困る第三にハ株主が專有する相場所と云ふものハ他國に其例が無い日本ばかり是があつてハ不都合だと云ふ樣な理由が夥たゞしくあつて、ヤレ投機ハ博奕なり、ヤレ轉賣買ハ契約の正理ふ背くものなり、ヤレ身許の薄い仲買ハ危險なりなと、種々の小言が諸方から出て大問題となり其時東京で指折の豪商紳士十餘名これに應じて起り所謂官民聯合の智惠を以て相場所仕法の改革案を考へ出しブールス法と云ふものに據つて新に商品取引所を創立し當時現存の米商株式ハ營業年限が來たら廢止すべし株主の損毛ハ氣の毒ながら公益の爲めにハ變へられぬ現に五分の公債を發行して七分を消却されると思へば詮方あるまいとエライ英斷であつた……

其時僕の朋友が非ブールス論を吐てあぶなく其紳士たちよ絶交さるゝ所であつた位の勢さ……米商株式ハ大に驚き此ブールスの大敵を喰止め樣と骨を折つたが中々力の及ぶ所にあらず取引所條例ハ遂に明治二十年五月を以て敕令公布と相成つたり、ソコで株式ハ廿二年五月を以て絶脉し六親眷屬集り嘆くとも更に其甲斐あるべからずと云ふ譯になつたが茲に不思議と云ふは新取引所を創立するにハ右の歴々の紳商連中が相場師だと賤しめた株式連中とが合併して願ハねば成らぬと云ふ事になつて來た所が株式連中が案外に強くッてィヤヂヤ〳〵責て一ケ年の延期が出來なくつてハ相談に乘らぬと威ばつた所からソンならソウと一ケ年の延期がサラリと出來てサア是から新取引所創立委員の會議と成つて見ると「ア、哀しい痛ましいかな條例の嚴なる規則の密なる至れり盡せり是でハ迚も思惑も出來ねば懸

引も出來ぬ」とパッタリ詰つた脂煙管ジウが十まで困つた仕宜、ソンなら改正して下さいと意見を出せばコハいかに、夫でハ株式の賣買法と五十歩百歩ぢや無いかいな。それでも宜しいブールスを是非とも建たい建させやう。米商株式延期ハせぬか。ナンノ延期をさせ樣か。ソンならソウと話しが極り愈々明治廿二年六月一日からハ株式米商とブールスの入れ代りぢやと吹聽して其支度に懸つた處が又もや御評議相變り此度は非ブールスに成て來て「一休米商株式を俄に潰して株主の損毛仲買の迷惑を顧みずと云ふハ宜しく無い、取引所の如き商業の機關たる條例を官員の料見ばかりて制定ずるハ穩當で無い、先づ當分米商株式を延期して置き篤と商業者と相談を盡した上で取引所の條例をも改正して行へる樣に仕やう」とソレハ〳〵有難いお捌き株式連中の大滿足ハ勿論であつたが不思議なるハブールス派の紳士たちも大滿足でブールスの風はドコを吹たかと云はぬばかりで平氣な顏付で四海浪風治まつて相場ハ原の如くあり、夫から段々と移り替つて先づ今日の相場會所と相成つたれど原が彼方へぐらり此方へぐらりと東株の相場を見た樣に亂高下をした相場會所なれバ明日が日にも亦どう成らうも知れぬ場所、ソレでも貴君ハ此會所の役員になつて機軸を取つて見やうと思ふかと二十年來の歷史を說き聞かせたれば清水ハ夢の醒めたる心地して實にもとや思ひけん側へにありける扇を以て柏子を取りあら尊とや嬉しやな是れ先生の御利生なり是までなりや嬉しやな〳〵かくて大臣動きなば又もや御意の替るべき……と濁たる聲にて謠ひたれば夢野ハたゞ此まゝに御暇と夕つげの鳥がなく東路さしてゆく道のと謠ひながら立ち去たり

○第十九回

斯くて清水は滯なく銀行の方も退身し相場會所に入つて活潑な商賣の有樣を日々實見したならば定めて面白からんと思いたるに是も夢野に一本極められて扨ハと思ひ止まりしかば差向き是といふ目的も無く日當りの好い所になつた鳥瓜みた樣にブラリッとして秋の日を過したり。ある日の事なりしが其頃東京の上等社會で持囃されたる俄分限の赤螺長者より諸方へ案内狀を發して「此程ハ日暮の里なる別莊に秋草の今を盛りと咲出て一しほの眺にて候尤も火葬場の烟ハ見に候へども是も世を觀ずるの一興かと存じ候へゞ來る何日に園會を催し候間午後二時頃より御來臨を待ち奉り候頓首謹言」と長者夫婦の名前にて申送つたり。其日になれゞ七草見物の園會さだめて面白い趣向が有るであらうと夫婦手を引合ひて來臨の官員貴顯もあれば、去とは迷惑のお招きなれど顔出し仕なかつたら惡からうと乙ナ所に義理立して來る紳商もあり、赤螺の事だからどふで碌な食物が無からうが丁度墓參りの次でなればとて出掛たる老人もあり、恰も好し其席にて某伯に遇て彼の一件を話して見んと所用を兼て來る人ハ是ゞ拔目の無い才子なるべし。長者夫婦は中門の内に立つて一〻に入り來る客ゝ挨拶し庭へ〳〵と招したり、幸に別莊の座敷にハ伊豫すだれを掛け渡したれゞ日本西洋折衷の氣障普請床の間のお隣がワニス塗の本棚(其くせ本は讀めもせぬのに雲母入りの根岸土で塗たる小壁の中央に暖爐の炉の炯突孔を伊豆石で嵌め込み其上を美濃紙で張てあると云ふ樣ハ見にねども栂の樣側の上に赤手の絨緞を敷き青貝入りの椅子を並べたるにて内の飾り附けハ嘸かしと押量られて恐ろしく殊ふハ高樓の家根の上には御成道で買つて來た出所不定の鯱を据ゑて植半の向ふを張り田舍屋の生垣から覇王樹がニヨキ〳〵と出しやばつて位牌の輕業を見せたる所などハ長者が得意の思ひ附きとハ知られたり、庭

の中ゝ据並べたる石ゝ本場の古鞍馬を除くの外諸國の石を集めて築立て黒ぼくの岩の間に躑躅が生たり伊勢御影のお腹から蛇口が出て瀑布が落ちたり夫ゝ〳〵不可思議の結構、一きゝ目立て見えたるゝ御影の手水鉢にて其縁ゝ竹椽を離るゝこと五尺八寸地上を拔出ることゝ七尺八寸ばかりに据ゑたれば椽鼻からゝ手も達かす水上げ石からゝ背も達かす是ゝ何の爲になる水鉢だらう夫にしてもどふして水を汲込むやら大方植木やが足場をかけて汲込むだらうと來客に不審を打たるゝゝ是れ長者の自慢なるべし。庭木の植かたや模樣取りゝ別に申さいでも此庭で多數を占めたる樹木ゝ先づ櫻でゝ八重に盤竈、梅でゝ紅梅に豐後梅、六角柳が其間に枝を垂れて百日紅ゝ今を盛りと花を咲かせ柘榴も負ぬ氣になって實を結びたれど松檜檜など云ふ常盤木ゝ寥〻として其在る所を知らざるにて十分なるべし。但し飲食の用意ゝ思ひの外に行屆き三河屋仕出の西洋料理立食の設け(酒ゝポンチ、甲州製葡萄酒、櫻田ビール其上に雁鍋仕出しの日本料理を備へ其外にゝ二三ヶ所ゝ置賣ゞぱりを仕つらひて鮪、天浮羅、漬燒團子など陳列せしめたるゝ長者夫婦が一生の智惠を振つたる趣向なるべし。扨また來賓の方〻を拜見するに男子ゝどうでも宜しいが貴婦人がたゞ思い〳〵に今日を晴れと出立ち、松茸の形したる麥藁帽子を頭ゝ乘せてゝ茸狩の意を表するもあり、黒い網を顔にぶらさげて蚊屋を張ってゝ面の皮が薄いと云ふ謎と示すもあり、仕立卸しの洋服の裾を家鴨の尻を見た樣にプリ〳〵と振り廻し泥の付くのも搆はぬと云ふ氣象を見せるゝ誰家の令嬢か、年は四十路を超ゆれども前髪の毛をクル〳〵卷き下げて額の皺を蔽し白粉ペト〳〵紅ピカ〳〵同行の紳士に手を引かれて遙かに聞ゆる洋樂の音につれてをかしな足附をなす舞踏自慢の年増ゝ誰氏の未亡人か、佛蘭西の帽子、獨逸の靴、以太利のコルセット、墺地利のケレノリン、英吉利のリボン、西班牙のレース歐洲各國上下三十年間の流

行を何でも搆はず手あたり次第に取用ひたるハ廣く萬國の長所を取ると云ふ趣意なりと云はれて見れば滅多に評ハ下されず、ナンノ婚禮の衣裳をお弔に着やうが遊獵の支度で舞踏ふ出やうが冬服を夏に用ひやうが宮裝で銀座を遊歩しやうが夫れが即ち自由の權西洋でコウだからッて一々眞似をするにハヘン及びませんヨーと叱られてハ大變まづ〳〵言はざるに若くは無し、併し寶飾の意外に疎末なるが多きハ是れが質素を貴ひ玉ふ日本婦人の美德なると傳教師が賞たるハなるほど時に取つて天晴のお世辭なり。將た又日本服の婦人を見るに見慣たるだけ別に不思議とも思はねど五十を越したる婆樣が鍋町一番形の大丸髷に珊瑚珠の行列を根に掛たる派手造りハ旦那の御注文かは知らねども本氣の沙汰とハ思ハれず、夫に引替へ十六七のお孃が薄ッぺラの島田に金簪一本濃鼠の細かい縞に黒繻子の丸帶とハ去とハ餘り小癪なり、白襟紋付の令孃が銀杏返しに結んだり、文金の高髷半振袖の姫さまが東下駄を履たり、トンチンカンの出で立ちハ何れも劣り優りハあらざれど自分で不倫いと思はねば人も亦別段批評を下さず詰る所が日本服の注文ハ第一が役者の衣裳を標準にして藝者やお酌の粧を眞似さえすれば意氣で恰當で人柄でどこやら仇に見ゆるものと押並べて思召したるハヤレ〳〵氣の毒千萬是でハ浮かり洋服婦人の惡口をかりハ言つては居られぬ嗚呼我國の女裝ハ謂ゆる內訌外患並ひ至るの秋なり如何がして此の厄運を救ふべきと餘計な苦勞をして獨り木の間の捨石に腰うちかけ左の肘を膝に突き掌にて頤を支へながら入り來る人々を餘念なく眺めて心に種々の妄想を書けるものハ是れ即ち清水潔なり

兎角する中に來客ハ園內に入り集ひて或ハ草花を賞し或ハ風景を賞め政治ばなし演劇ばなし商賣ばなし遊戯ばなし人の噂や世の噂さ、ありこでハゴヤ〳〵此所ではコッ〳〵ペチャ〳〵クシャ〳〵、アハ……

オホ……、オヤ〳〵さうですか、ヨカ〳〵承知だと話の共進會へ中〻騷〻しいものだと清水ハ思はず興に入つたる所に後より清水さん〳〵と呼ぶ聲に驚かされて振向て見れば生質子爵夫人にてぞありける

○第二十回

清水ハ急に座を起ち恭しく挨拶して浮世をなしやお世辭の交替などにて暫し時間を費したる後に生質夫人ハ清水に向ひて、妾ハ貴君に度〻お目に掛つてお心易う御座いますが子爵にハお顏を存しながら未だ染〻御懇意に成らぬを殘念に思つて居られます幸ひ今日も此所へ

参つてアレあうこふ火見入男爵と話をしてで御座いすまから貴君ちよつとお近づきにお成り下さりませんかと懇懃ふ申込まれてハ固より辞るべきに非されば清水も、夫ハ有り難う御座ります實ハ疾に僕より願ハうと存君ながら憚つて差扣へ居りまして御座いますと如才なく答へ夫人に伴れて生質の方へ進、みたり火見入ハ夫と見て取り夫人と清水に會釈して工合よく其場を外したるが是も中〻交際に擦れたる貴族とハ知られたり。生質ハ夫人が、是が清水さん、是が子爵と紹介するや否や快活に清水の手を握り、ィヤ是ハ〳〵清水君夜會などでハ度〻お目に掛つてお顔をも見識り御才名ハ其前善く承つて居たがッィ御懇意を結ぶ機會がなくッて毎度夫人とも其事を話して居ました。と相手を反さぬ交際上手清水も挨拶のお世辞を述べてよく〳〵子爵を見れば年の頃五十三四春ハ矮けれとも骨組ハしつかりしたる丈夫造り白髪交りの髯ハ半面を覆ひ眼鏡ごしに光つたる眼ハいか様政治

家の一人上院でも首領株と云ふ相貌なり文學技藝社交風流の事ども三人三ッ金輪にて三十分許り話したる後に、清水君明夕ハ御兼約ハ御座らぬか。イエ別に。……然らば午後七時に御入來下さい晩餐を差上げたいから。ソレハ有り難うと承諾して別れたり。かくて其翌夕の晩餐が交際の口切にて或ハ演劇の見物或ハ馬車の運動と段々に深くなりしが生質子爵は平生の驕慢に打て替り清水を禮待するを一方ならざれば清水も此の貴族ハ世間の評判とハ雲泥の違ひ賢を貴び才を愛するの君子なりと竊かに感じ入りて他事なく往來したり。然るに生質ハ胸中の一物を永く藏すこと能ハざりしと見にて彼の赤螺が園會の日より凡そ十四五日も立たる後に是まで表面に張つたる黒幕を振落して一場の新劇脚本を清水の前に演じたり

朝餐も畢りて生質と清水ハ兩人差向ひにて紅茶を喫み居たり生質は卷烟草入を清水に渡しながら机に臂を突き清水の顏を眺めて小聲になつて、時に清水君余ハ君の目的が承りたい子君も一度ハ官員ふも成り商人にも成つて官民の事情を御存しなれば別に申すにも及ばぬが只今の如く何時までも遊んでお出なさる譯ハ有るまい早晩何の業にても要地を占むるお考であらう併し君の才氣と云ひ伎倆と云ひ天晴れ指折の政治家ふなれる器量それを民間ふ埋むるハ實に惜いものだナンと余の忠告を聞て政治家になつてハどうだエ……ナニ隱すに及ばぬ此節世間で評判の政治小說「煨芋の煙」を君の著述だらう……イヤ余に御遠慮ハ無用君が政治家の内幕を訐いて藩閥の餘弊を諷した所ハ至極妙だ余も實に御同意する子君の筆力ハ國民の友の記者が見たら沈着痛快にして眞摯なり是ぞ英雄の文なると賞贊するであらう誠に感服に堪へずと余が黨派の老輩たちもひどく嘆美して居たゼ、かれ程の文才を利用する時ハ政黨の爭に於て大に其力あるハ必定君も御承知であらうが三年前改租の一條で國權黨が現内閣に籠絡せら

れて半途より反覆した故に折角に余が黨派で思ひ立つたる改租議案ハ少數にて敗れ現内閣が其信用を固くしたにハ驚いたよ、原來改租説だから自由黨や改進黨ハ言ふに及ばす國權黨でも機會黨でも二ッ返事で同意を表し所謂議院大團結で現内閣を仆し我黨が主になつて諸黨と相談しまづ聯立内閣を組織し其上で思ふ存分に政權を我々共が掌中に握る見込たとひ大地を打つ槌ハ外るゝとも此見込ハ外れまいと十分に信じた所が當事と何やらハ向ふから外るゝと云ふ諺の如く國權黨の奴原が表裏した爲めふ殘念ながら敗北したるハ恰も二十年前英國のグラッドストーンが愛蘭の改革議案で聯合黨の反覆ふ不覺を取たると同樣の結果であつた、尤も一勝一敗ハ政黨の常觀なれバ敢て憾とする譯でハ無いが現内閣の政略を此上に實施して文武の政費ばかり嵩んでハ日本人民ハ疲弊するの外ハ無い去れば國家のため人民の爲にハ現内閣を仆さゞれバ到底政治の改良ハ出來ぬ、ぢやに由て今年の議院でハ是非とも我等の黨派が必死になつて勝利を得ねばならぬ夫に付いて下院でハ大螺吹之助、杉林天狗郎、今野流造、乙樫決闘次を初として討論に於てハ鬼にも神にも向はうと云ふべき一人當千の辯士等都合其勢百二十餘人また上院の貴族でハ赤沙汰侯差酢世伯何奴根伯勅遷議員でハ古錦嚢氏町替博士等を初めとして斯く云ふ我等を合せて三十餘人二手に分かれて押出す計略この旗色を見るものなら兩院にて提灯派と知られたる頑慶流の面ゝハ忽ちに同盟に加はるに相違なし然る時ハ理非得失を論するに及ばぬ何でも多數を以て内閣不信用と決議し今の連中に辭職させ我等が新内閣を組織するは旬日を待たずして成功すべしダ、どふだ愉快な事では無いか……君も我黨に一味してチクト働かれたら宜からう爰が君の爲に立身の端緒で御座らうゾ……ナンノ働けぬ事があるものか君の筆才は即ち其働の利器ぢや原來我黨派の連中ハ演説討論は中〻巧みだか筆を執るには拙

な者ばかり偶〻新聞紙の社説を書たり投書を書くものもあるが生代言の辨論書を見る樣に理屈ばる計りて肝腎の急所に徹へぬから惡くすると相手に揚足を取られてギウ〳〵言ハせらるゝ事があるに困るよ、君が向ふ鉢巻縄襷腕によりを掛けて一番得意の才筆を振ハうものならうれこうゐらい効能があるは請合ちや……イヤサ堂〻たる正面の議論よりは側面から人身攻撃をする方が遙に利が好い敵を射るにハ先づ馬を射よ人を仆すにハ先づ傷を附けよとハ古人の金言ナンノ大功ハ細瑾を顧みず武門の世にハ斬取強盜ハ武士の習とさえ云つたでハないか大丈夫事を謀るに臨んで尾生の信を守るハ無益なり何でも有る事無いこと思ひ附次第に書並へヤレ某子爵ハ牡丹餅を喰過きて滿座の中で同僚の頭を打たとでも某男爵ハ或る閨秀に戀慕して拒かれたとでも何の誰ハ銀瓶を賄賂に貰つたとでも誰某は官有地を非常に安く拂下げたとでも痕跡が有らうが無からうが事柄をれもしろ可笑く書立て新聞に出したり又ハ小説雜誌に出版して世間に吹聽しパット其評判をさするが一の手ちや……すると世間でハ扨ハサウかと話に枝が咲てイヤ實ハ斯だろうだナニ誠ハ云〻ぢやげなと尾に尾を附けて風聞が立つて來ると一身上の信用が此の攻撃の爲に危くなる處をソレナ議院で政治上の攻撃を下そと先ハ内外から攻られて耐えきらず辭表を出して樞密院にでも退かざるを得ずと云ふ場合に陷るがドウダ感心ナ計略であらうがなと恥る色なく説きたれば流石の清水も餘りの事に驚きて暫しハ默然たり

○第二十一回

稍〻あつて清水ハ上着の釦丹を外づし故と打寛きたる体を示して生質に向ひ閣下の御高説を伺ひ大に心得に成る廉もあり殊にハ數ならぬ潔を左程までに思召し下さる〻段ハ有り難う存じますが老練なる閣下へ對し奉り若輩ものゝ潔ふぜいが彼これ申しまするハ失敬の至ながら原來政治黨派を分て互に議院ふ於て勝敗を爭ふハ公明正大に致さねば相成らぬ筈で御座る敵黨の主義政略が不都合とあらむ素より遠慮會釋なく議場よて論破するハ勿論の事新聞紙をも利用し演説をも利用して縱横に議論を盡し公議輿論の賛成を得て以て我黨の勝利を謀るハこれ當然の儀なれば不肖ながら潔と雖ども他日政治黨派に加ハる時ハ十分に力を用ゆる心得で御座れども此の區域を越して更に敵黨の首領等が一身上の私事に立入り其陰微を訐くハ實に卑怯千萬の振舞にて君子の愧る所と存じます況て痕跡のない事をも作つて其人を傷つけ樣とハ閣下の賢慮とも思はれませぬと眞面目になつて責たるに生質ハ些少もひるむ色なく呵〻と打笑ひ、イヤ清水君マダ若い〻〻公私の別ぐらぬハ余が無學でも承知して居るヨ併し政治海の事といふものがソウ君が言ハる、通り公明正大に行ハる、ものでは無い喩ば土俵の眞中で相撲を取る時に足を取ったり出扱に突たりするハ力士の恥であらうが相手方でその樣な穢ない手を出して此方を負かす時にハ此方も亦た否でも其手を用ひねば成らぬ此方ばかり我ハ男だと立身でも向ふがソウしない時ハ仕方があるまい夫を構ハずに負て居るが好いと云ふなら頭から政黨など、大層な事を云いぬがよい人間世界の事が一から十まで品の好い計りでハ役ふ立たぬ都合によつてハ下手ナ仕事もせねば勝が取れぬ余も十四五年前までハ君が今いつた樣な説を主張したが段〻實地を經歴すると頗る前日の迂遠なりしを悟つた所があるヨ。ナル程御尤もなる御説明とハ承りま

すが夫れでハ今日政治黨派は主義政略の異同に出るに非ずして其人に出るの黨派いはゆる朋黨パルソナルパーチーとしか思はれませぬ。その通り如何にも人に黨するヨ其人存すれを其黨翠り其人亡すれば其黨熄むと云ふ譯サ併し是ハ日本ばかりで無い世界各國黄くも政治黨派あるの國にーて何れか人に黨するものに非ざるべき畢竟主義に依て結合するだの政略に依て一致するだのと表面にハ理屈を附けて立派に辭柄を構ゆれど一皮剝で見玉へ實ハ皆ペルソナルパーチーさ、夫だから二十年前にも改進黨と云へば大隈黨のと、自由黨と云へば後藤板垣の黨だ何黨ハ某何黨ハ誰と世間で認めて居たゆゑ其黨の人々が氣を揉んで「イヤ〳〵決して左樣で御座らぬ僕等は主義に由て結合するものなり總理その人に同意をる者に非す」と眞赤になつて辨明したけれど世間では「ナーニあんなに辨明しても矢張其人の黨だ」と評したでハ御座らなかつたカ、是だに由て今日の實際ふ於て主義目的より黨派を論ずるならば一方ハ藩閥黨で即ち往昔の薩長聯合の餘威を今日まで受け繼だる連中と一方ハ非藩閥黨で十餘年前に藩閥を打敗つたる連中の二ッあるのみ是とても非藩閥の一點だけが同論と云ふに止まり其他の政治の意見に付てハ十人十色で一ッとして目的を同くしたる所ハ無いぢやないか貴公もソンナ野暮を云ハずともアノソノ今余が勸めた通り我が黨派に加入して一番働き玉ヘナ。働いたらドウ成りますか。貴公が眞に働いて我黨に忠節を竭す以上ハ愈々我黨が勝利を得て内閣を乘つ取れば君を顯要の地位に置く樣に只今より豫じめ役割番付の中に名前を入れて置かう。ソンナ事が出來るもので御座りますか内閣の更迭で政務官が入れ替つたと申して各省の事務官までが入代る譯にハ參りますまいが……。ろりや表面だけの事ッなんの内閣が更迭して各省の大臣が代るからにハ次官、局長、書記官、參事官ハ云ふに及ばず課長に至るまで入れ替やうと思へば入れ替か出來なくてどふなるものか

既に米國などでハ門番まで入替るが是れ即ち代議政体議院政治の妙所と云ふもの愈々以て我黨が内閣を乗り取つたら拙者ハどふして下さるか、勿論その心得あり貴殿ハ地方官が望なら何縣の知事にして遣らう、貴公ハ法律家、かそんなら司法省、貴様ハ會計か得意とな、夫では大藏省と夫々に役割を豫約して兼々秘密官員錄が製して有るとて手箱の内より帳面を出して清水に示し、君々の番附を他人に洩らしてハ困るが内實これ位に手廻しをして十分の期望を銘々に持たせて置かねば誰が眞先に進んで働くものか、斯様に云ふと警察官が聞たらソリヤコリ謀叛ぢや大變と騒ぎ立であらうが前途の期望を是位に貯ハへて豫約をして置くハ我が黨派の臍を固むる上策と云ふもの、ドウダ清水君我ハ王族なれバ天子たらん卿ハ藤氏なれば關白となり玉へと將門が純友に説た様に似るかも知れぬが余ハ老輩だから大臣にならう君ハ壯年だから秘書官なり書記官局長なり遠慮ハ無い望み玉へ貴公の働き次第で余がきつと請合て任命いたすぜ大丈夫が事を謀るに臨んで躊躇するハ屑よからず是程うまい話によもや君も不承知ハあるまいナアと甘味たつぷり牡丹餅で頬邊を叩かるゝが如き相談に清水ハ何と答ふべき詞も無く默然たりしが、段々の御高論て詳かに相分りましたが中々私しどもが力にハ及びません事業かつ歸朝以來いまだ歳月をも閲しませねど實ハ政治海の風波ハどんなものだか經歴も御座らず旁々以て當分の内ハ此身を政治の境界に投しませぬ覺悟で御座ります右に付き今日より改めて閣下の御旗本に附く事ハ決心いたし兼ますが何れにも他日その場合に相成ましたらば必らず御愛顧を願ひ奉りませう新聞演説の事も都合によつてハ御高論を伺ふ儀も御座りませうが先づ當分ハ手を出しませぬ積り尤も小説ハ好ゆゑ時として書く事も御座らうが政治家に限らず人身の攻撃ハ誰の事でも致し度く御座りませぬ夫故閣下の御内證の事でも決して攻撃ハ仕らぬ

程に御安心下さいまし且つ今日の御談示ハ何様の事が御座つても他言ハ仕りませぬ又たとひ他日閣下と反對の地位に立つ様なる仕宜に相成りましても斯まて私をバ御愛顧下されたる御厚意は中々忘却仕りませぬ猶篤と歸宅の上勘考仕り又申上る儀も御座りませうと体よく斷つたれば生質も内心ふはコ・ィッ失敗たりとは思へども左あらぬ体にて、ィヤ御尤千萬ぢや貴公の見識は流石に感服いたす余もアノソノ今の大に慨る所があつて滿足したヨ夫れ位の見識が無ッては敵に取つても怖くも無いが味方にしても頼もしく無のサなんの貴公議論が合ふが合ふまいが政治上の見込と一身上の交際とハ全く別ぢや御同様の交際ハ主義の異同に由て變るべきものでは御座らぬ此後とても自然用向があるなら遠慮なく御相談なさい余の力に叶ふ事なら何ても承はらうヨ(但し金談ハ此限にあらず)ムヽ思ひ出した今夜ハ夫人が貴公を誘つて芝居に往きたいと云つて居たよ、ソレ〳〵青柿の令嬢が頻に君の事を賞て居るが池内の令妹に嫉まれねバ宜いかと夫人も氣を揉で居たぜと如才なく話を紛らしたれば清水も宜い程に塗抹て暇を告げ門外に出てホット息を吐きヽアヽ怖かつた恐ろしい目に遇ふ處であつたナルほど油斷のならぬ世の中ぢやと獨り呟きつゝ旅館ハ歸つたり

○第二十二回

旅館の小使ハ部屋の戸を二ッ三ッコト〳〵と叩き入れよと云ふ返詞

を聞が否や直に戸を明て入り一寸と目禮して左の手に持たる盆の上に名刺を載せたるまゝ右の手に持替へて差出だし、此お方が昨日の御返詞に付き參上いたしたお目に掛り度いとの御口上で御座りますと述べたり清水ハ其名刺を見て、左樣か是へお通し下さいと命ずれば小使ハ再び目禮して立出でたり。後に清水ハ机の上を少し片付ながら、ハテナ彼の郡樫藏めが何の用て來たらう是非とも面會の上に申述たい事がある何時罷出て宜しいかとの問合に付き否む譯にも行かず今朝在宅と返事したが扨ハやつて來たナ何レ碌ナ事でハ有るまいが兎も角も逢て聞て見やうと思ひたる折柄かの郡樫ハ小使の案内につれて入來り清水を見て慇懃に腰を曲め、イヤ清水さま誠に以て其以來ハ大きに御無沙汰を仕りまして相濟ませぬ大層よいお天氣になりました貴君ふもお替り樣なくてお目出たう御座いますなどゝ文政天保頃の舊式を守つて先づ疎遠の詫言次に時候の挨拶次に壯健の祝詞と順序を追て述ぶること凡う二十分時間これにハ清水も當惑してヘイ〳〵左樣で御座います……ドウ致しましてと答ふる外にハ爾なかりしハ可笑かりき扨この挨拶永〳〵と事畢つて郡ハ四方を見廻して世間ばなしの序文に渉り漸く肝心の用向に移つて云く、時に清水さん突然に申上ますと何か私が山でも目論で貴君を引出しに來たかと思召ませうが中〳〵左樣ナ譯でハ御座いません御存の通り私も年ハ寄りますし昔風の頑固で世間に合ひませんからマア餘り顔出もせずに引籠で居りますがナニ蟹ハ甲羅に似せて孔を堀ると申しますが本統で私どもハ少し許りの小金を彼所へ遣たり此所へ廻したりして有り難い事に粥なり飯なり戴いて居りますから夫で宜しう御座いますが(ト少しく笑を含みて)ソコが人間の慾で出來る事ならモウ少〳〵儲け度と存じて私に相應の仕事があるならと存じた處が私が年來懇意に仕まする小山堤師郎さんとソレ貴君も御存じでせう十年まへ越中から素手で來て

今でハ七八萬の身代になつて居る熊鷹攫さんとフトしたとから話か出來て御内〻ですが實ハ三人組合の商法を初めまする相談を致し一世間へお話し下すつてハ困りますが一會社を建てまする積りです、ナニ根が私共の事だから体した譯にハ參りませんが四萬と五萬の資本を卸して屹度四割か五割にハ廻す事が出來る算盤が立ちましたが其商法と申すハ一世間へお話し下すつてハ困りますが一實ハ諸官省の御買上品の御用達を致す積りです、どふして〳〵此節のせち辛い世の中に是と云ふ金儲ハ御座いません細奇やうでもマダ〳〵寛裕なハ政府のお仕事なんでも政府の御用を引請ねば纏まつた金ハ儲かりません

ヨ貴君かの羽高會社公先商會上前組筬込組などを御覽じろ十年か十五年の中に大層の身代になつたハ皆なお上の御用と請負たからで御座いますぜ……ソコで私共の目論見が先づ平常の建商賣が諸官省お役所向の小買物用達で其から何品に寄らずお買上品を引請やうと云ふ趣向で一貴君世間へお話し下すつてハ困りますが一實は其の手續が豫かじめ概略と云ふ意味と解すべし附て居まして夫〻電信の緣を引張らうと云ふお方も内〻御座いますのサそこで資本ハ私か三萬圓熊鷹と小山が壹萬圓づゝで都合五萬圓丈も財布尻ハ私が握つて熊鷹は買出しの方小山ハ賣込の方を引受ます積りに役割を極ましたが本店ハ私が抵當流れで取つて居ります材木町の家が丁度よいから其所と極め慾得社と申す名前を附けて立派に表札を出し店先の樣子など

ハ品行よく品格と云ふ意味に解すべし拵へる積りで豫しめ造作の繪圖も出來て居ます……貴君小買ものハ何でも少なくつて大抵三割ハ儲りますヨ仕入を上手にして納を上手にすれゞ五割の上にも成りませうと思ひます尤も西洋ものハ歐山商會が一切引請て私どもへハ名前賃を一割出さうと云ふ約定が内〻御座います其外材木鐵具なども同じく下請を仕やうと云ふ商人が澤山御座いますから引請高の八分

か一割でたんと儲けまいと思へば資本ハ少しも遣はずに手放れよく取ますのサ併し是にハ向ふと此方と飲め嚙めの間で無つては出來ませんがそりや貴君金との相談だから思の外に結合が附ますヨ私も其所ハ年來覺に込た仕事で御座いますしマア早い所が七千圓のものが壹萬圓で納まり散金の減を一割千圓出した所が差引貳千圓ハ儲かります、ナニ商賣人ハ吝ちやァ往ません功能のある散金ハまつかり出して先に肝を潰させる位で無くつちや甘い仕事ハ出來ませんぜ其所ハ憚りなから郡樫藏でスきつと相手を取込て見せまする……然るに茲に一ツ六かしい事があると申すハ社長でス社長にハ何でも世の中に評判の好い附合の廣い政府の通りの好い人を据なくッちや下廻りの方ハ話が居いて居ても上の方で支えて願が濟ませんテ、と云つて滅多な人を引ずり込むと夫こそ廂を貸て母屋を取られる樣な目に遇ひますから本尊さまの見立が大事で御座いますソレに貴君その社長さんが自分で―ヱーなんと申ました子ソレひじきに油揚と云ふ樣な六かしい名であつたが―ソウ〳〵總菜……ヘー左樣〳〵交際で御座いました、其交際をして上手に立廻る人で無くつてハ仕事が取れませんでス明治二十二三年頃までハ何でも極銘にさへすれば其人に御用が下つて白帷帳面の腕ッ子でしたが今日ハ中々さうで御座らぬ先づ上等が會席料理中等が有合見繕ひ下等が饅飯と三段に分れ或る時ハ西洋料理のお振舞また或る時ハ待合茶屋の眞寢子時によつてハ別莊にお招き申して打寛いでの御遊興、パースー宜しう御座いますとお相手をしたりモウ夜が更まして御歸館にハ餘り遲う御座います小座敷で御一睡遊ばしまして、ソレはね子さんおまへお煙草盆を持てアノ離へ御案内申上ておくれと目て知らせて押やり其儘ろこにお伽していかなる夢や結ぶらんと云ふ樣ナ藝もせねを成りませんーヱヽ清水さん此爺も中々意氣ナ事を知つて居ませうがヲー

成程會社や商會の中にハ晝ハ西洋服晩ハ日本服で二人引の人力で飛ひ歩行き遊ぶが商賣の樣に仕て居る人が多い、がどふしてアレで金が儲かるかと堅氣な商人ハ不審を打て居ますがソレで無くちや大儲の出來ぬが開化で御座います鄕に入れば鄕に從はねば成りませんのサ……右に付き清水さん貴君を慾得社の社長さんに致したい貴君くらゐの人ハ少ないが貴君も亦た社長さんにお成りならば御立身ぢや御座りませんか、尤も別に御入金にハ及びませんが貴君の公債證書を五千圓ほど身元金にお預け成さいまし其利子ハ貴君へお渡し申して私共にハ取りハ致しませんホンの慥だと云ふ保證で御座います、扨て月給は一ヶ月五十圓つゝ上げませう其上に純益の壹割を上げますから夫で世間の義理附合、暑寒の遣ひ物から飲食の入用、藝者の玉祝儀まで一切合切お出しなすつて其殘ハ貴君の所得と成すつて宜しい別に私共が其分配を戴かうとハ決して申しますまいから利口にお遣なさりや其丈ハ貴君のお儲で御座います、尤も現金の減ハ仕事を言附かつたら其時に出さうと約束をして置き朱で書たものと引替に遣りますから是ハ別勘定に立てゝ宜しう御座る其中をまた貴君が先方から割戻を取つた時にハ私と貴君と山分に致しませう是くらゐ貴君割の宜い話ハ御座いませんせ私も貴君のお父さまにハお世話に成つた御緣もあるから貴君を見立てゝ小山熊鷹の兩人にも内話をして得心させた位で御座いますナニも恩に掛ると云ふ譯ぢや御座いませんがエー貴君思召さまハ如何さまで御座いますかと說出したり

○第二十三回

得意氣に郡樫造が説出たるを聞て清水ハ扨〻耻を知らざる愚物かな。己れが筋違へなる目論見を成して利欲を貪らんとするさえ奇怪なるに剩へ我までも其の仲間に入れお先に使ハんと考へ甘言もて我を誘ひ欺かんとする事の面憎さよをのれ老ぼれ爺め面の皮むいて遣らんものをと思ひしが、イヤ待て斯る廉耻を知らぬ奴を面折したりとて蛙の面に水で洒〻〻して居るに違ひあるまい無益の議論をせんよりハ寧う思ふ存分思弄て叩き返へすが責めての腹愈なりと思案したりしかば故と色を和げ、へー成ほど段〻の思召立ちを承つて見れば至極結構なお思ひ附これハ屹度お見込の通り儲かりませう實に是位の金儲がぶら附て居るのを世間の金持連中が知らぬといふハ迂遠の次第サ郡さん貴君の老練で采配をお振なさらうものなら水の手ハ十分に廻るし此方の望み通りに成るハお請合ダ誠に以てお目出たいが、夫に付ても社長ハ是非貴君が御自分で成さらなひでハ往けませんせ外の者でハドウして〳〵歴が利ません何が扨て貴君が大將ならを私も及ばずながら雑兵になつて駈廻りませうが先づ一番に取極めねばならぬ事が御座る夫ハ外でも無い私に何程の月給を下さいますか迚も一月ゐ五拾や百のはした金でハ車代ハおろか煙草の料にも足ませぬか少なくも三百圓づゝハ頂戴せぬば暮が附ません夫から交際費が隨分澤山に入りませうが勿論一割や二割の減ハ出すと仰しやつたが夫くらいでハ失禮ながら甘い御用ハ取れますまひぜ銀瓶や金時計の利目が有つたハ天保時代のヒ明治三十七年の今日でハ現金も現金シッカリ握らせねは此方も亦シッカリ儲かりませんヨ依て私の考にハ貴君のお見立の通り私が精一ぱい働いて儲かる丈ハ必らず儲る樣に致さうから先づ貴君の方でハ資本が一ヶ年に六分の利に廻れば宜いと腹を据ゑ其上の利益ハ皆私の儲になすつて下さいませんか左樣相成

れば魚心あれば水心で私も又その中から内〻で貴君に一割のお禮を致しませう尤も萬一その商に損がいつてもソリヤ貴君がたの御損で私ハ搆ひ無し月給三百圓だけで不肖いたしませうヨ又身元保證の公債證書をお預も致しませうが私の公債ハ記名ゆゑ融通ふハ使へませんぜ併し夫があれば自づから根抵當にも向ひますから利子ハ勿論私が取つて其上に年八分の利を貴君の方から頂戴いたしませう夫で御相談を取極め契約書を書き調印する事に仕りませう善ハ急げと申せば只今こゝで契約書を取替さうでハ御座らぬかと机の上なる硯箱を引よせ罫紙を廣げて既に契約書をサラ〳〵と書かうとするを見て郡ハあつ氣に取られィヤ是奴が〳〵乃公に進入を掛たる欲張り野郎めおのれ如き若僧に欺さるゝ樣な樫造でハ無いが全体乃公がおのれを引掛やうと思つて來たら其上を越して乃公を引掛やうとする大膽不敵な奴コリヤ中〻由斷がならぬ此上長居をして饒舌たらどんな變轉に懸られうも知れぬと心の中ふ打驚きしが左あらぬ顏付にて、ヘーなる程〳〵お左樣さまで御座りますか貴君の仰しやる所も御尤の樣にも存じられますが私一人の料見で直に御相談を極る譯にも參りません何れ小山や熊鷹とも篤と相談の上で改めて御挨拶を致しませうナーニ是がきつと取極つたと云ふ次第でも無くこんな組合を結んだらドウだらうと云ふ位のホンのダロウ話しで御座いますから中〻當にハ成りませぬと何だか分らぬ言を並べ散してヤット其座を胡魔かし早〻に暇を告て歸つたり

清水ハ左もあらんと推量して郡を送り出し部屋の戸をハメと締め椅子に身を投るが如くに懸り大息をホッと吐き、嗚呼憐むべし清水潔ヨそも卿ハ何なる人ぞ數日前にハ生質子爵に口説かれて他人を蠱毒するの兇器たらんとし今日ハ又郡に口説かれて國庫の財用を詐り取る機關たらんとしたり幸ひに卿に一點の良心あるによつて此禍に罹る